# 家庭雜誌

第貳拾五號

新發明 大有益 清酒增量新法（さけのますめふやしほう）

傳授 謝金 參圓

●此新法は本館長野上三省先生が釀造化學の作用に基き多年の實驗を經て今回初めて頗る完全なる良成績を得られたる前代未發の至大有益法也即ち本法によれば清酒壹石を容易に貳石（總て倍量になす法なり）になし得るものにて酒造家に取り甚だ有益なる未曾有の新發明なり

●本法にて清酒を倍量にするは頗る輕便にして衛生上毫も無害なるは勿論元酒より一層美味に出來其配合藥費は至つて廉價にて且つ決して一變味の憂なし故に世の酒造家及び酒類賣買營業者が一たび本法を利用せば忽ちにして大益を收得すること確證する所也●本法は元來發明者一個の專賣特許を出願せんとは思ひし所或る酒造家が熱心の勸誘により今回酒造家或は酒類業者に限り一郡區中一名宛の割にて發明一切の秘法を傳授せんとす望の方は郵便爲替にて謝金參圓を添へ大至急申込あれ着金次第詳細筆記せし傳授書を書留郵便にて送付す●本法は發明者及び傳習者相互の利益を保たん爲め漫りに傳播せしめざるものに付壹郡區壹名宛の外は斷然謝絶し假令謝金百圓を投ずるとも決して傳へざるものなり●此發明法は本館より郵送する秘傳書に基き施せば直に製造し得らるゝことを確證す

東京神田區五軒町拾九番地（電話參百七拾六番）

傳習申込所 日本授産館

迅速撮影 機械入らず 簡便早取り寫眞術（てがるはやとりしやしんじゆつ）

此寫眞術は今回米國にて發明したる最も斬新に頗る簡便なる新寫眞法にして一たび此術を知覺せば如何なる山間僻陬にありて何人にても直に實行し迅速撮影し得らるゝものなり●此寫眞術は機械を要せず數種の藥劑を以て全世界の萬象を有の形其儘に瞬間に早取り寫し得らるゝものにて如何なる素人にても此術の秘傳書を一讀せば容易に實施し得らるゝ事（藥劑は何れの地にても辨じ至極廉價のものなり）●此新寫眞術は紙寫し「ガラス」寫しとも自由自在にて永久不變色の新法なり殊に絹ハンカチーフ及び綿ハンカチーフ等への撮影は最も斬新にして且つ麗妙なり●此新寫眞術は壹千名を限り謝金五拾錢（郵送税六錢）にて通信傳授す●謝金着の即日詳細確實なる秘傳書を郵送す●此秘傳書を見れば何人にても自宅にて直に出來得る事●爲換は神田郵便局あて取組●切手代用二割增し

東京市本郷區湯島天神町壹丁目卅八番地

傳習申込所 都屋藥局

◎牛乳ノ如ク飲ミ易ク且好味ナリ
此スコツト乳菓中ニアル肝油ハ如何ナル胃弱ノモノモ少シノ滯リナク容易ニ服用シ得ル樣ニ調化シアルモノナリ
◎筋肉ノ製造者トシテ有名ナルスコツト乳菓ハ肺病、瘰癧、精神疲勞、小兒ノ衰弱症及慢性ノ咳嗽ヲ治スルニ最好最良ノ調劑トシテ夙ニ歐米諸大醫ノ賞贊措カザル處ナリ
◎龍動スコツト及バウン謹製

日本一手特約販賣所
横濱廿八番
神戸十七番
米國貿易商會

◎賣捌所ハ全國至ル處ニアリ



純粹ノ肝油及次亞燐酸ノ配劑ナル

# スコツト乳菓

て『顚覆したる乎、本書は幾分か説明したりと信ず。

◎松平越中守、水野越前守、阿部伊勢守、井伊直弼、寛政の内を本としたる改革、天保の外を主としたる改革、弘化嘉永の變通的政略、安政の復古的政略、其の人物、其の事業、擧げて此の中に存す。

◎藤田東湖、佐久間象山、横井小楠、敵愾的精神、國防的經綸、開國的識見、尊王攘夷、開港佐幕、公武合体、當時の巨人、當時の活題目、擧げて此中に存す

◎若し夫れ本題の主人公たる吉田松陰に到りては、著者滿腹精神の注傾する處。其の時勢、其の境遇、其の血統は、遂に彼が如き人物を作りたるを說き。更らに家庭に於ける彼れ、天下の士としての彼れ、革命家としての彼れ、教育家としての彼れ、其他總ての彼れ、描き來りて紙上に血あり、聲あるや否やを知らざれども決して蠟人形、土偶の類にあらざる可し。

◎嘗て『國民之友』に掲げたるものを增加する十の七八、刪るもの十の一二、本來の面目一新したるを覺ふ。松陰の妹婿にして、其の親友たる楫取男爵曰く『事實御考據の詳密なるは、喙を容るゝ所無之』と、其の孟浪杜撰にあらざるは、幾分か之を知るに足らむ。

◎本書は更らに吉田松陰の肖像、久保田米僊氏の實寫せる松陰神社、松陰墳墓の圖を添ふ。又た踏海失敗の禍祟たりし佐久間象山の松陰を送るの詩。及び松陰東北日記。松陰より横井小楠に與ふる書簡。長州の先輩村田清風の詩。何れも石版刷にて、其の眞蹟を寫したるものを附載す。快心洞目すれば、當時の形勢歷々として眼中にあり、維新革命前の先達偉人、冉々として人に逼るを覺ふ。

東京市京橋區日吉町四番地
發行所　民友社

明治二十七年三月九日發行
家庭雜誌第貳拾五號

# 目錄



# 家庭雜誌第貳拾五號

（明治二十七年三月九日發兌）

## 社説

### 何を以て祝せん乎

抑も明治二十七年三月九日は、辱けなくも　兩陛下大婚二十五年の祝典にして、吾人四千餘萬の國民に於ても、難有くも奉祝し參らするなり。

人倫の道は、端を夫婦に發すと、古の聖人は申されたり。我が　兩陛下の愛度も、二十五年の間、和樂安康の御生涯を遂げ遊ばされ給ふよ。如何ばかり皇家の幸福にましますよ。而して皇家の幸福は、亦た國家の幸福にあらずや。

我が　皇室は、國民の仰ぎ崇む聖所にして、兩陛下は、國民の活ける摸範として、窮行實踐、躬から國民を敎へ導き給ふ、御大心にておはすなり。されば吾人國民たるものは、漫然として奉祝するのみならず、篤ヨと奉祝するに就ては、自から愼み、戒しめ、勵み勤むる所なかる可らず。

國の本は家に在り、家の本は夫婦にあり、夫婦の道治まりて家治り、家治りて國治まる。我邦の今日に於て、最とも嘆ず可きは、夫婦の道、未だ治らざると是れなり。

古は糟糠の妻、堂より下さずと云へり、然るに今日に於て、少しく夫婿が立身すれば、乍ち舊妻を離婚するものあり、而して夫婿の立身なるもの、徃々妻家の助力によりて出で來りたるに係らず、無情にも一朝罪なくして離婚するものあり。現に妻家より學資を得て洋行し、洋行後官吏となり、而して其の妻君を離婚したるもの、一二にして足らず。自から怪しまざるのみ

ならず、世の人も之を怪しまず、斯くして一家治まると云ふ可き乎。

且つ婚姻は人間一生の大事なり。然るに其の容易なる、猫兒の授受よりも甚し。試みに最近の統計によれば、去る明治二十四年に於て結婚の數三十二萬五千六百五十一。而して離婚の數十一萬二千四百十一。結婚人口千に對し八、離婚人口千に對し二、七六。即ち結婚千に對し、離婚三百四十五となる即ち三割四分五厘の離婚となる。東京に於ては、毎月六百内外の結婚に二百内外の離婚あり。結婚とは何んぞ、離婚せん爲めの下地なりと。極言するものあるも、餘儀なき次第ならずや。

結婚離婚の夥多なると共に、蓄妾の風行はるゝは、甚だ嘆はしき次第ならずや。維新後に於て、妾は二等親と云ふ名義にて、國法上家族の上に認識せられたり。今や二等親の名目廢したりと雖も、尚ほ家族の上に識認せられつゝあるにあらずや。看よ少しく富裕なる家庭には、概して一人、二人の妾なきはなく、甚しきは五六人の妾を蓄ふものすらあり。而して間々一夫一婦の家庭あれば、却て珍らしき變り物の樣に心得るものあり。此の如くにして夫婦の道治まりたりと爲す乎。

藝娼妓の社交上に、認識せられつゝあるは、洵に我が社會公德の上に於て、深く慚づ可き次第ならずや。現に今回の神聖なる大典にすら、彼の賤む可き業を營む婦女をば、晴れの場所に引き出し、以て祝意を表せんとするものあり、是れ實に非禮千萬の至りなりと雖、社會がのそ非禮を非禮とせずして、之を看過するは、社會良心の痲痺したる徵候と云はざるを得ず。

現に我邦に於ては、三萬五百三人の公許を受けたる賣淫婦あり。而して東京の如き四千七百廿人の賣淫婦あり。その海外に出稼して、日本國の慚をさらすもの、それ幾千百と云ふを知らず。

吾人は顧りみて、此等の事實を見、斯の神聖なる大典

を奉祝するに際し。深く自から愼み、戒しめ、勵み、勤むる所なくんばあらず。蓋し是れ二十五年大婚の祝典に於て　兩陛下が國民に躬から致へ給ふ所以にあらずや。

奉祝の道一にして足らず、和歌を詠ずる可なり、品物を献上するなり、祝會を催ふす可なり。然れども四千餘萬の國民が道徳を高くし、品行を潔ふし、夫婦相和し、一家相睦し、内は一夫一婦の人倫を守り、外は社會の公徳を保ち。夫婦の道治まりて、一家治まり、一家治まりて、一國治まるに到る、是れ奉祝の最も其の當を得たるものにあらずや。

# 論説

## 君民慶を同ふすべし

東西皇室の歴史を案ずるに或は皇帝と皇妃との御間睦ましからずして、皇妃を廢せられ玉ふたる事あり、或は皇妃御入輿の後未だ幾年ならずして、何れのかたか御薨去ありて幽明を隔て玉ふたる事あり、二千五百年連綿たる我皇朝の歴史の如きも、時に不祥の斑點を印する者なきにもあらず、吾人竊に之を追惜す、然るに今は何等の吉時ぞ、我兩陛下御大婚の後二十五年間何の御障も不豫爲在、芽出度銀婚式を擧げさせ玉ふ。皇室に取りて、之に踰ゆる吉事あらんや。今ま陛下が我皇室の典禮に未だ曾て之れなき銀婚式を擧げさせ玉ふ御趣意を考ふるに下、萬民をして、德風に偃し、上に倣ふて與に俱に夫婦の和合、一家の平和を祝するの禮典を與させよとの賢き思召なる可し。夫れ一家の平和は、夫婦の和合より來る、而して、平和なる一家相集合する時は、則ち玆に平和康樂なる一國を成すものなれば一國平和の源は夫婦和合の泉より流れ來るものといはざるべからず。我國を平和にし、我民を康樂に

するは、兩陛下の夙夜忘れ玉はざる御心にして、今回の銀婚式も亦此の御心より出でたるものならんと推察し奉るなり。左れば國民が兩陛下の銀婚式を奉祝して、最も兩陛下の思召に適ふ所以の第一義は、萬民も亦上に倣ふて以て、銀婚金婚の兩式典を擧行して、一家の平和を祝し并せて一國の平和を祈るに在りと爲さゞる可からず。抑夫婦結婚して、後二十五年又は五十年間和合するは、是れ容易なるが如くして容易ならず、その間人生の千辛萬苦を經て此に達するものなれば、結婚後二十五年目と五十年目に於て、之を祝するの典を擧くるは、當然の事なるのみならず、其朋友、其近隣も亦集り來りて、其家の泰平を祝せざる可らざるなり。新聞紙の報ずる所によれば、地方の某豪農は、朋友故舊を集めて金婚の宴を開きたりと、是れ最も兩陛下の思召を奉躰して誤らざるものといふ可し。騷ぎ立て噺し立つるのみが忠義にあらず、奉祝にあらず、賢こき思召を會得し、消化し、誤なく奉躰することそ國民の本分なれ。

結婚後二十五年にして、二十五年前の一昔を回顧せよ、如何に面白き可笑き趣味ある記憶の津々として溢れ出るよ。而して更に二十五年にして、即ち結婚後五十年にして回顧せば、又た別種特味の記憶に躍れて愉快を覺ゆるなる可し。父母の時代より花嫁花婿の時代を眺むるは銀婚式なり、祖父祖母の時代より父母の時代を眺むるは金婚式なり、此等式日に當りて、頭を回らして、廿五年或は五十年間人生苦樂の縮圖を眺めて之を見る、苦も亦樂なり、不幸も亦幸福なり、不快も亦快樂なり、獨り之れによりて過去の趣味を呼び起すのみならず、現在の苦痛も爲めに輕かる可し、現在の快樂に至りては更に倍又倍するものある可し。思ふに兩陛下御結婚の節は兵馬倥偬として維新の大業未だ成らず、兩陛下が正に御心を國事に惱まし給ふたるの時なり。

今ま銀婚式に際して、當日を回想し、吾人國民も亦多少の感慨なくんばあらざるなり。

# 科學

## 動物の生涯(二)

『魚は人より自由にして、蠅は自由が化けたる一の黑き化身なり』とラスキンは云ひたりしが、我等も一寸動物を見る時は、いかにも自由なるが如く見ゆれども、そは餘りの想像に過たりと云ふべし。成る程小さき動物は遊びもし、戯むれもすべけれども、老ひたるものは實に熱心に働けり。魚や蠅の事に付きては、我等は知る所少なけれども、動物の生活を精しく觀察せる人々は、如何に彼等が勤勉に働けるかを知らん。彼等が目的もなく、花の上を飛びあるき、その邊りに惰けをる如く見ゆる時も、實は油斷なし食物を集め、巢の材料を求めつゝあるなり。蜂の能く働く事は屢々說稱となる事なるが、其蜜を集る時は、一分時間に二十種の花を探すとあり。去りとて、一寸美はしそうなる香などには決して惑わず。一種類毎に膽精して見廻るなり。

蜜蜂は蟻と等しき勤勉とは云ひ難たけれども、朝まだき露の消へざる内より、夜暗くなる迄、恰も休みなき器械の廻るが如く働きて、日曜日も天長節も變らずに働くは、たしかに我等の見留る所なり。

或る學者は動物の自由快樂を說き、或る學者はその苦みを說き、他はその働きと滿足とを說く其中に、或る人は遊戯慰はたゞ人類にのみ與へられし惠なりと云ふ人もあれども、そは誤謬なり。魚や蜂は聲を出して笑ふとこそなけれども、遊戯や慰さみはたしかにあり。

ゴールドと云ふ學者は、蟻の遊戯を細密に觀察して『慰』と云ふ題にて種々記載しけるが、フオーエル氏も熱帶地方の蝙蝠の事を記し、終りに至りて云へり『彼等が遊

戯をなす事は打ち消すべからざる事實なり』と

## 睡眠

人は他の動物と等しく、睡眠てふ大なる惠を持てり。とは神の柔さしき看護。思想を覆ふの外套、食慾を靜むる一種の食物。飢をさゆる飲物。凡ての物を買ひ得るの貨幣。帝王と農夫とを平均せしむるの權衡なり。或る動物は我等の如く夢みる事あり。たとへば犬は主人と獵に行きし事を夢みる事あり。されど下等動物に至りては、夜間も常に眼を閉ぢざるものありて、その眠たる時と起きたるときとを分つ能わざるとあり。如何なれば、我等は眠るや、如何なれば人は生涯の三分の一は生根もなくして過すや。プラオンと云ふ人は云へり『我等の一生の半は、地球の蔭にて過でし、その三分の一は、死の兄弟に引き去らる』と。休息の人躰に必要なるは、明かなる事なり。されども人の心は人の眠りし間も、尚ほハッキリと起きすまして、その生命を保ち、思想も同じく彼方此方とさまよへり。されば心の爲めには眠は不用なりやと云ふに、矢張眠りによりて心は安まるなり。動物の種類によりて、夜中各〳〵となすべき仕事を有せり。大理學者ハンボルト氏はブラヂルの林の摸樣を目のあたり見たるが如く明かに記して曰く。

『夜の十一時と云ふ頃迄は、何れもシンとしたるが、それよりは近所近邊の林の中には、恐ろしき響始まり、中々に眼を閉ぢ得べくもあらず。その聲の中には數もわからぬ猛けき獸の叫びけるを、アメリカの土人のみはその聲を聞き分けゝり。今啼ける少さき聲は猿の聲なり。この叫はサパヂウスの聲、或は虎の聲、狽の聲中には多くの鳥の聲もあり。一疋の虎が餌を求めつゝ、林のはじに近づきし時、犬は驚きたる啼き聲を始めけるが、逃げて我が釣床の下に隱れんとあせりたり。暫らく靜かになりたりと思ふ内遙かの木の上より

虎の嘯き聲耳に響けるよと思ふ内、猿の鋭くして長き叫はだん〳〵に近くなれり。こは虎の赫しを逃れんためにや。かゝる聲は、余の旅行中、所々にて聞きし處なり。

『ある時土人等と寄りつどひて談じける時、余は獸が毎夜〳〵同じ頃より、叫び始むるは、何故ならんと云ひけるに、土人は答へて、獸は毎夜滿月の饗應をなすなりと云へり。されど林の中の騒動は、月夜よりは風雨の夜の方を多しとすと云へり』

動物の一生をさゝゆるの武器は、爪と齒なるが、或るものは之を以て他を害するために作られたるものは己を守るに適當すべく作られたり。

これを知らんと欲する人は、爪や齒にて受くる所の毒を見れば、確むるを得べし。蜂蛇等の害は云ふ迄もなく、人々の知る處なるが、或る蟻の如きも、刺したる時は何の事もなけれども、その毒は五六寸の深に達するものあり。他の特別なる武器を有するものは、電氣を有する猫、魚によりて見るを得べし。鱝と云ふ魚の如きは、その電氣を以て人を殺すに、充分なり。或る植蟲は糸の室と名づくる幾萬となき細き穴に、電氣の糸の巻きたるものを貯へて、己が餌にせんと欲するものに觸るゝ時は、その糸は走り出でゝ食物の肉の中に入り込む。如何にもよき武器にあらずや。



烏賊のインキは屢々例に上る所なるが、もし他物に襲はるゝ時は、その黒インキを吐き出し、滿面眞黒になりたる時ヤミにまぎれて逃行くなり。

ボンベドルと云ふ虫は、他の物に襲はるゝ時は、脊の皮に含む一種の酸素を吐き出すによりて空氣に觸れて鐵砲の如き響を發す。其他蜘蛛の糸、蟻の刺針等、種々の武器は我等の手近に見るを得べし。

## 感　覺

大抵の動物には、人類と等しく五つゝの感覺あり。但しその器機の在る所は、各々異り。或は脊に眼あり、尻に耳あり。脇腹にて啼く物などあれども、人類よりも感覺の鋭どきものは少なからず。犬の鼻の如き、鷲の眼力の如き、その一例なり。且つ又我等の眼は或る色に向ては非常に感じ、或る色に向ては感ぜざる事あり。理學上より云へば、我等の目の綠色に感ずる事は、赤の七百五十倍なりと云ふ。或る動物は人間の見へざる色を見るものもあり。或は人類の聞こへざる音を聞く者もあり。凡て音は音の高くなる程皷動多くなるを常とするが、人の耳は一秒時に三萬五千の波動より外は聞くとを得ず。如何なれば五萬、十萬の波動を聞くとを得ざるかは一の疑問なれども、人の耳と他の動物の耳の搆造と異りたる處ある事は、知るを得べし。或る動物は耳の中に平らたき髮ありて、各々神系に續きたり。或るものは耳の中に少き固きものありて、全じく神系につゝきたり。是等は始めより耳の中に供へ付きたる道具なれども、或る虫は、物を聞かんとする時は、自分の爪を以てあたりにある砂つぶを拾ひ上けて、耳の中へ投げ込むものあり。

虫には二つの大なる目の外に、大抵三つの小さき目ありて、鼎立せるが、この二種の目は各々其役目を異にせり。二つの大なる方の目は、人間の目の如くにして、凡ての物を見る時、外物は目の中には倒さまに映り來

れども、他の三つの目は、人の目の如く、一枚のがらすにて覆われたる目にあらで、時に二萬個位のがらすより成るとあり。而して此方の目には外物は、其まゝ正しく映り來て、此く五つの目の內、二つは人間の目の如く外物は倒さまに寫り他の、三つは正しく寫るが故に、虫は果して萬物を正しく見つゝあるや否やは、人類の知る能わざる處なり。

人の耳は三萬五千の波動を聞くをその聽力の極度となせるは、已に記せし處なるが、大理學者ヤング氏は光に付きて面白き發明をなせり。即ち光線が波狀になりて、人の眼中の腦膜に達する時、一分時間に百萬の七億萬倍の震動を以て達する時はその物此色に見へ、それより漸々に震動の減ずるに隨ひ、色を異にし、百萬の四億萬倍の震動に下れば即ち赤色となつて顯ると云へり。

## 方角を知るの力

動物が方角を知るの力は、特別なる一種の力なりとて、種々なる試驗は動物學者の間に試みられき。實に動物が方角を知るの力は、人間の未だ有ちしとなき力にして、人類は實に他の動物の眞似をなせりと云ふも虛言にあらず。鳩の己が住家を記ゆるとは、屡々人の實見する處なれど、鳩は一度に甚だしき遠方の路は覺ゆると難く、だん／＼になるゝを得べし。

大理學者ダルヴヰン氏は面白き經驗を爲して、云ひけるは、何にても逃さんとする動物を箱の中に入れ、急に廻わして逃す時は、方角を失すべしと。これは佛國の或る處にて、移住の際猫に經驗せる也。或る人は蜂を、一里半の遠方に携へゆきて其脊に白きものを塗り、さてこの方を試みて逃せしに、十四の內三匹は元の家に歸りたり。又た蟻を捕へて、巣より二百間離れし處にて、同じ法を試みしに、巣を探がすの念は、たしかにある事を見留たれども、遂に歸り得ざりき。

# 文藝

## 小君子（下）　湖處子

### （五）漁夫の娘

世に海ほど荒きものはなし。廣さといへば涯りもなく、深さと云へば測られず、靜けき夜すら、波の音トウ〳〵と數里の外までも聞ゆ、まして風の立つ時には、海の上見ゆる限りは、鳴る神の怒るが如く、山の如き大濤立ちては崩れ崩れては立ち、向ふ所は城郭の如き軍艦をも覆へす、まして木の葉の浮べる如き端舟をや。かの漁夫と云ふものは、此の危ふき海上に世をわたるものなり。其の危ふきと云ふばかりなし。若し世がまゝにならは、あらゆる漁夫を止させて、安き業を與へたしと、云ひし君もありしとぞ。

何處なりけむ、はる〳〵とかすめる海を控へし洲崎疎らに見ゆる漁舍の一軒に、親一人、娘一人の漁夫ありけり。親は齡五十を越えたる老人なれども、一人娘のおいちが猶ほ幼なくして、舅をとるべくもなかりしより、弱れる骨身を惜まずして、毎日毎日海に出でけり、おいちも亦父の心を知るものから、一すぢに父につかへ、朝な〳〵舟出を送り、夕な〳〵岸に迎ふるなど、萬事父がこゝろにかなひぬ。



さて又父が遠征に出かくる時には、近處の洗濯婆が許

に、おいちを托けて行くとなるが、おいちは婆許へはゆかす、宅に留まつて父の不在をまもり、寂しき日を一人暮し、闇き夜を一人臥せり、臥せる時にも起る時にも、海上に風のなき様、父の恙がなく歸る様、しみじみ天の神様にいのりぬ。父もまたこれを知るゆゑ。恐ろしき雲、尋常ならぬ風、海上にたつ時にも、おいちがわが為に神にいのり居ると思ひて、心づよく引あぐるなり。

かくて久しく大洋の漁業に日を經て、おいち戀しと、はる〳〵と波をこき、内海に乘入るゝ夕、遠き岸に立てるおいちの影の、豆の如くに顯はるゝ時、父の喜はいかばかりならん。其喜はおいちが影の大きうなるほど大きうなり、其面の辨すやるがて、「いちよ」と叫びて、俄かにも櫓の手を早めつ。波うつ際に足をすゝめたるおいちは、サックとゝまる舟に飛びこみ、無事に歸りし父にとりつき、父はおいちを抱きしめて、舟底にひさまつき、荒くれたる眼より、涙こはして神のめぐみを感謝するなり。

海上風險にして、夫を失ふ妻、父を喪ふ子少なからす、おいちを托かる洗濯婆の如きも、亦其不幸ものゝ一人なりけり。かくも危かるが中に、おいち親子が、かく安全に世を送ると、全くおいちの信心の徳なりと、處のものは云ひあへり。かゝる人の聟となる身こそ幸なれ。

## (六) えらい畫工

遠からぬ丘の上に、村の鎮守鎮坐し玉ひ。其宮より幾十段の石梯、いく階となく下り來りて、平地にと下る處に、このあたり小名高き石の鳥居あり。鳥居を出でゝ、ひろ〳〵たる廣庭あり。其廣庭の中央に立てる大なる籠堂は、今村の學校となれり。學校の後には、四五軒の藁ふき家立ならび、其の一端の小屋の様なあばら家に、一人の子供ありけり、誰も

渠をば七と呼びたり。七は今年八歳になりき、二年前七がホンの六歳の時、當鎮守の春市に、小供相撲の興行あり、七も友達と一處に、愛らしき力士の數に加はりしが、誤つて足を傷め、遂に生涯の不具とはなりぬ。是より七は、杖にすがり、片足爪立つて飛び飛びあるきたりしかば、誰も七をば「ピッコ」と呼へり。悲しきとは是ばかりでなく、見る通りの家に生れ、親の手に、本石盤を買ふ力なければ、學校は隣なれども往くに往かれず、唯友だちが元氣よく昇降するを、羨ましげに見るのみなりき。

「乃公は學校に往かなくても宜い」と、七は痩我慢をして見たれど、朋友は七一人學校に通はぬ故に、渠を友だちの數より斥け、他村の子供の如くに侮どり、學校の往來に、七が家の前を、聲たかく「アーイーウーエーオー」とさけびつゝゆき、七を見ては、「絲と云ふ字を知てる乎」、「犬と云ふ字を知てる乎」と、さも物知り顔に弄つて通り然らずんば何とか云ひ、默つて通るとはなかりき。時としては仲間をくみ、七を誘ひ出し、「字あてごと」と、地に字を書き、七に讀ませて其の讀めぬを笑ひ、或は七の字を書きて、其何とか讀むを見て、一齊に「七の明めくら」、「七の跛の明めくら」と呼ひ、七か怒つて、杖をあぐれば、前後より一度に起り、杖を執つて引倒し、喝采して逃ぐ、七は豆つぶほどの涙もつ目を睜つて、「覺えて居ろ」と大喝す。

七は友だちと學校を憎み、跛ならずば朋だち等を一人〳〵なぐり倒し、學校でも何でもメチヤ〳〵打ち毀してくれむものをと怒りぬ。されど身の不自由には勝れず、さりとて學校の側に遊びて、朋友等の惡圖よむ聲きくが面白からねば、毎日學校の初まる前に、杖に縋り〳〵石段を上り、鎮守の宮に往き、學校の了る頃まで、一人して快よく遊びぬ。

社には何かありし乎。社には繪馬ありき。或は馬の畵、

或は鷹の畵、或は神功皇后の朝鮮征伐の額牛若丸が西塔武藏坊辨慶を負かす處、八幡太郎義家が阿倍貞任を追ふ處、惡七兵衛景清が石の牢を破るところ、仁田四郎が荒猪を爲とむる處。河津三郎が俣野五郎を投ぐる處。曾我五郎十郎が親の敵工藤祐經を打つ處等、數限りもなき剛の者の繪は、糸、犬、錨の懸圖よりは、十層倍も面白かりき。中に就て、七が最も心を動かしたるは、此頃新たにあがりし谷底の組打の額にして、二人の鎧武者が重なりあひて、今が勝負と云ふ處、渠が目に宛然畵とは思へざりき。然して上なる武者の勇ましき武者振は、勝を好む小供心に投じたるは勿論なれども、其下なる武士が齒を嚙み眼を睜れる無念の樣は、何ゆゑか、一層七が心を奪ひき。されば七は、之にうち向ふ毎に、初の間はまづ双方の顔を見くらべ、既にして目は次第に下なる武者にとゞまり、いつしか齒を嚙み、目を睜らし、己れ其武者であるかの如く、憤激し、斯くして渠は疑問を發し「これは誰と誰だらう」と自分に問ふ。

一日七は例の如く宮にて繪馬を見てありしに、一人の紳士、自分ぐらゐの子を伴れて參詣し、一拜の後、其子にも繪馬を見せて、一々繪ときをして聞かせければ、七も其後に佇ずむて謹聽し、最後に例の谷底の組打は、羽柴方の加藤主計頭清正と佐久間方の山路將監と、賤ヶ岳の組打にて、上なるが加藤清正、下なるが山路將監と云ふを聞き、その加藤清正が憎くなりぬ。紳士は猶ほ「どの繪馬の一番巧ひのだらう」と云ふ其子の質問に對へて、この賤ヶ岳の組打を第一とし、「こは此國の畵工野田竹山と云ふ畵工の筆にて、畵工もこの位かけばえらいものだ」と云へば、子はいと〳〵感服したるが、其後に一倍感服したる小供ありき。

「畵かきも此位かけばえらいものだ」、えらいものだ」と、七は父子の歸りしのち、口の内にて幾度となく

「えらいものだ」と繰返したるが、小き胸に忽然として大望發しぬ。「乃公もその畫工にならう、そのえらい畫かきになつて、見ん事朋友の敵を打ふ」。七は小供ながら、確然として獨り志を立てぬ石の如く心を決しぬ。

是より七は毎朝怪しき筆、墨、硯に、古帳面の反古を持ち出て、先づ氏神を拜して「えらい畫工になし玉へ」と一心に祈念し、然る後組打の額を手本に山や谷や加藤清正よりも何よりも、最先に山路將監より初め、熱心に模寫し、反古の裏の山路將監幾枚となく、風に吹かれて散亂せり。

其頃畫家竹山、遊歷の途次、自家の筆跡を懷かしみ、此宮に詣り、こゝに意外なる弟子を發見して一たび驚き、其の反古裏の山路將監を見て再び驚き、其志を聞て感涙をなかし、懇切に其名と其家とを問ひ、渠を先たてゝ其父母に面し、渠を伴ひ往むと請ひしに、父母も外に取り代へのなき子なれど、其志の切なるにまかせて許しければ、七は「見ん事えらい畫工になつて見する」と、天にも昇る心地して父母の家を辭しぬ。

後十五年にして、其幼なかりし友達が青年の常とて、飲食や、夜遊など、考へなく日を送る間に、七は既に竹田と號する一廉の畫工となりしより、御願成就のため、自個と志を立てし所の賤ヶ岳組打の額を畫きて奉納したり。其手際、殆と師のに勝るとも劣るまじとの評判にて、數多の親は其子を携へて其下に來り、「畫工もこの位かけばえらいものだ」と云ひあへりとぞ。

## 母の乳

筑峰女史

こゝは何所の深山里か日々稼ぐ若夫婦のなれし手業む

つましく木樵はた織りて浪風なく暮すあり二人が中に子をもふけ喜ぶ事大方ならずかあい我子の行末の爲めとて以前にいや増して家業を勵みいたりしがみつればかくる世の習ひとてふとした間違ひより言葉爭の浪立ち妻はをさな子を殘して親里へはやとく歸れとせき立てられ何とせんすべも嵐ふく夕暮をつげの鐘あわれにも泣くなく我里さしてたどり行ぬ妻が出で行きしそのあとに夫はむつがる赤子をすかしつゝ短夜ながらいと長き心地して明くるを待ち兼ね乳ある家を尋ねしに幸ひなるかな山の麓の知べの家に乳餘りある婦人ありなれど全く預け切りにすべき力も無ものから先方の都合を見計りて赤子をば抱きつゝ通ひて乳をもらひ兩三日を過しける

ある朝の事なりしが日頃の勞れにねすごして妻戸のすきもる日影にいたく驚きこは心なき事してけり山の麓とはいひながらげに不便なり深山路を下り行くその内に麓の婦人も山稼ぎに行きて留守にもなりぬべしこまりし事をしてけりと獨りかこちつ門の戸をあくればふしぎにものきにつるせし見馴ぬ德利ありこは如何なる譯やらんと立より見れば何やら白きものを入れてけりいかなるものかと試むるに其味乳にたかはねばこはげに不思議の事どもなりいつこの人の惠かは知らねども日頃信ずる我か神の助けなるらん有難やと幾度となくをし頂き其まゝ我子に與へければさも喜ばしげに呑みほしける父は盲龜が浮木のこゝちして喜ぶ事大方ならず今日は是にてすませども明けなば又々麓まで請ひに行かねばなるまじとかこちながらも德利をば再び軒につるしてぞ其夜は床に就きけりまた翌朝も昨日の如く同じく乳のありければ喜ぶこと限りなしなれど不審の晴れざれば何者の仕事ならんか見屆けんと朝まだき起きて窺ふ事度重なれど更に手がゝりなくてぞ月日を送りける

霜降り月もすぎ行きてかゝのふもなき極月の末空かき曇り嵐と共に降る雪のいとゞ寒けき小夜中にいかがはせしかをさな子聲を限りにむづかりければ父は困じて居たりける折しも若き賤の女が雪ふみしめてたどりきつこの家の外面に立ちより打窺ひて居たりしが乳を慕ふて泣く聲のそと面にもれて聞こへしかば身をきらるゝよりもくるしくて不憫やかほどにいづるこの乳をのませてやりたさは山々なれどはぐくむ事もなり難き離緣の身の上たゞこの乳を飲んで泣音を止めてよといつもの如く我が乳をば德利にしぼりつゝ軒に掛立歸らんとはしつれどもさはいへ今夜にかぎりてむづかる事のはげしきはどこぞ痛みはあらざるかと戸際に身をばすりよせて內の樣子を伺ひけるこの物音のきこえしかば夫はひそかに雨戸あけ雪の光にすかし見て何者なりやとさけぶ一聲にこなたは驚きあはてふためきてにげんと爲すとたん虫がしらすか一層はげしく泣出すみどり子の聲に堪へ兼ねて思はずそのまゝ雪の上にひれふしぬ夫もさすが呼び入かねて再び雨戸は閉せしが小兒はいよ〱泣きつのりあはや玉の緖も絕へなん計りの風情なり父は抱き上げすかしつゝあやせど中々に泣きやむ樣子もあらざれば困じ果てゝぞ居たりける泣く音は胸に打ちひゞき乳は自づとしたゝれば母は堪へかね家に入り夫にあやまり子を抱き乳房をふくませければ不思議やな忽ち泣き止みぬ二人のものは玆に初めて先非を悔ひ嗚呼我々二人はあやまてりつまらぬ事の爭ひより何にも知らざるいとし子まで苦るしき思ひをさす不憫さ實に親たる可き責をも盡し得ぬこそ恥かしけれと悟とれば夢のさめしが如く元の如くに治まりて夫婦は夫よりいさゝかの爭ひもせで共稼ぎ子供大事にいと樂しげに暮しける實に歲月は矢の如く子供も成長なし一人前の男子となりしかば遂には是が妻をも迎へ一家繁昌しけりとぞ。

これはこれ他人の事ならず夫婦の者は我とこの母なり
をさな子は忰やそなたの事なりかし年月早く我々が再
び夫婦となりしより二十五年を經たりけり今かくいは
ふその席にてそなた等の如き若夫婦に打向ひ、懺悔話
の昔語をするも將來もろ共に中睦しくもろ共に愼み
勵み露ほどの心得違ひの無き樣にと我等夫婦の婆心な
りと語るは六十路あまりの老父母に聽き居る者は若夫
婦席は然も銀婚式祝ふ或る山里の家の內

# 繪畫

## 畫學の栞（四）

金仙

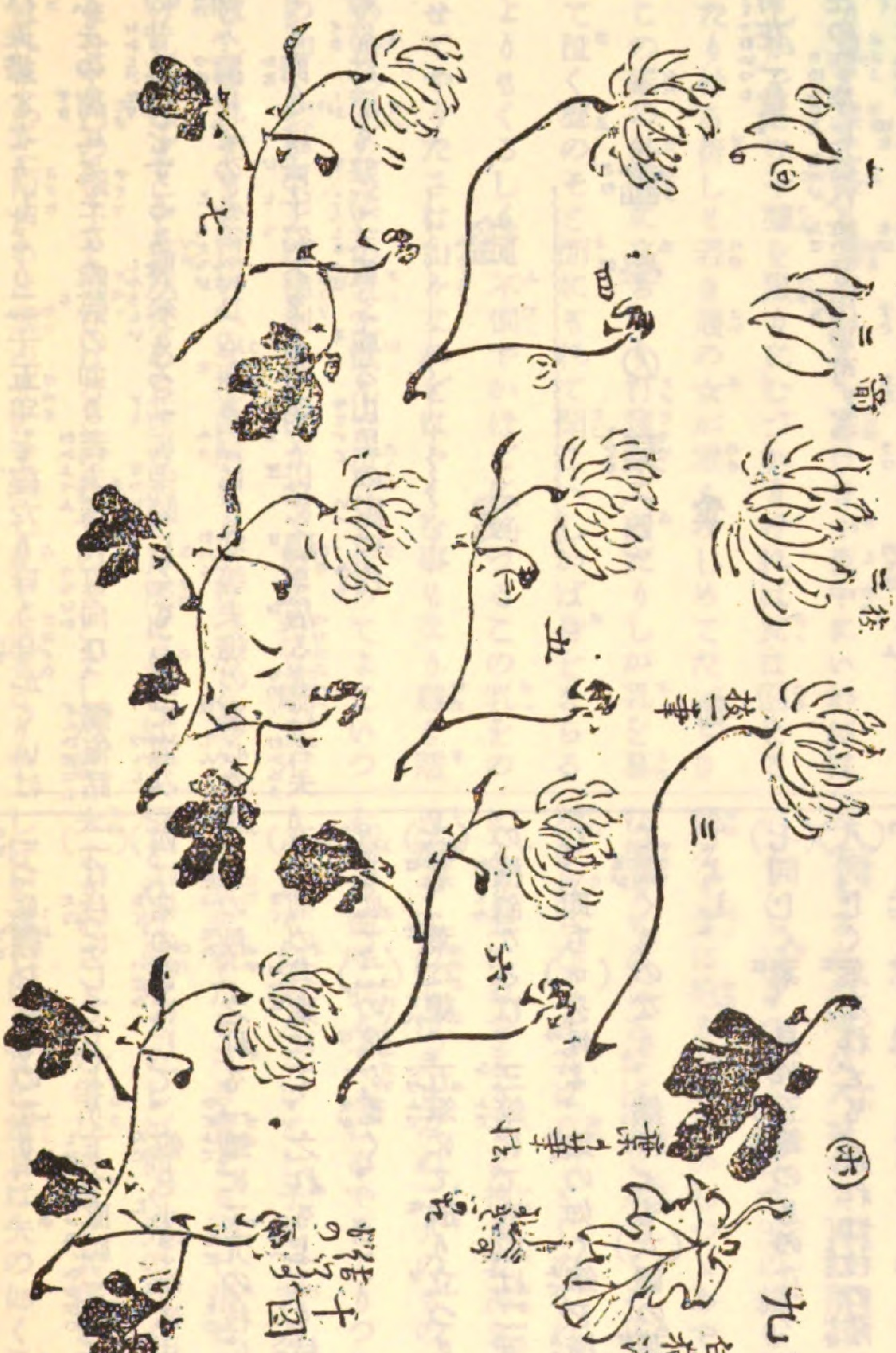
菊花一枝、

左の順序に從ひ筆を用ゆ可し、

菊は先づ花より畫き、直に枝に移りて後葉を附す、即ち

（一）菊花の瓣を（イ）（ロ）の二筆にて畫き、
（二）も同しく前の如し、總て此花は二筆にて成りし瓣を一つに纏むるものなり、
（三）は枝にして上より下へ直に一筆に畫く、
（四）は菊の蕾にして、筆を小まかに用ふ可し、（ハ）印は即ち蕾の枝、之れも一筆にて元の枝に附く、
（五）は菊の若葉にて、之れも上より枝に一筆に畫き、其返しにて（二）の葉を畫く、
（六）葉、葉は總て五筆にて成り立つものなれど、其形狀の横斜なるは、三筆にても或は二筆にて畫も差支へなし、即ち（ホ）を見よ、斯の如く筆を横に上より下へ續けて畫くものなり、然れども（六）圖の葉は斜なれば三筆にてよし、
（七）同じく葉、是れ五筆のものなり、
（八）同じく葉なれども、是れは枝の蔭にあるものなれば、極く筆を輕く用ゆべし、即ち三筆の點にて成れるもの

なり、今爰に至りて始めて菊花一枝の結了するものなり、そは葉にしべを入るゝなり、即ち九圖の如し、菊葉を白描法にて骨書きに書きしもの、總て草木の葉はこのしべにて活し或は殺すものなれば、能く注意して入る可し、因に云ふ、草木の葉は互生に成れるものと、對に成れるものとあれば注意す



べし、
しべの筆法は眞中の線を始め、上より下へ書き、後其分れたる小しべを書く、
十圖は其完全せしものなり、
墨色、菊花は淡く、枝蕾は濃く、葉は(六七)を濃く、(八)は淡く(總て枝幹の蔭になれるものは淡くす)、しべは濃くすべし、葉の墨色加減法は前々號にも記せし如く、筆を清洗して其の先に墨をひつ掛け書けば、自然に墨色も面白くなるなり、

## 無聲詩話

(十三)

世の武士時代となれること已に久しくして、粗豪なる武士も漸く美術の趣味を解するにおよび土佐の公卿的繪畫は次第に衰へ、遂に武士的繪畫たる狩野起り、元信に大成して永德に一轉したることは、上來敘し來りたる所の若しと雖、細に之を察すれば彼等は皆時勢の趣味の代表者なりしなり。

元信の畫の武士的は戰國時代の武士的にして、自ら殺伐界の高踏顯象たる厭世脫塵の氣を含めりき。是れ彼が時勢の見なればなるべし。永德が畫の武士的は文祿慶長の武士的にして、氣宇放大細節に拘ちず、且つ高踏的嗜好よりは現世的趣味に富めりき。亦彼が時勢の見なりし故なるべし。

上の好む所は下之より甚しく、倚武の時勢は永德の畫意を更に極端にまで擴張し、遂に狩野山樂を出しき。」

山樂名は光賴法橋に敘し修理亮と稱せり。本と森氏にして永德に學び、父子の約をなし、別に京狩野の流を傳へぬ。其畫勁健餘りありて永德の氣宇を缺けり。亦是れ慶長元和の時勢見なるべし。

而して威嚴堂々太平君主の標本として武家百代の崇榮

を窮めたりし江戸三世將軍の殊遇を受け、一門の勢威隆々として旭日の如く、狩野繁昌の絶頂、武士的繪畫



探幽筆　李白觀瀑之図　金魂寫

の極致に達したるものは、則ち寛永の大畫家探幽齋守信なり。

彼が畫は、其武士的繪畫なることは、元信と同じけれども、他生的にあらずして現世的なり。其雄渾莊大なることは、永德と同じけれども放肆にあらずして嚴正なり。

譬へば元信は亂世の武士なり、永德は戰勝國の武士なり、探幽は統治時代の武士なり。元信は立てり、永德は踞せり、探幽は坐せり。元信は舊びたる緋威の鎧を着せり、永德は新らしき黒皮威の大鎧を着せり、探幽は素袍大紋を着せり、元信は超然なり、永德は傲然たり、探幽は儼然たり。

探幽、父は右近將監孝信、孝信は光信の子、光信は永德の子。

彼は慶長七年を以て京師に生れ、延寶二年を以て七十三にして江戸に沒し、守信を名とし、探幽齋を薙髪後の號とし、幼名を采女といひ、生明筆峯居士白蓮子と

も別號したりき。宮内卿法印に叙任し、二百石を食む。墓は玄德院守信日道居士の九字を刻して、池上本門寺に存す。

其居江都鍛冶橋に在りしを以て、世其後を鍛冶橋狩野と稱せり。

傳ふ、彼は曾て仙臺侯の爲に屛風を書き、侯が之に報酬として與ふべきものを其欲するに任すに及び、彼直に米一俵を人に負はせ、二俵を馬に乘せ、以て送つて明六つより暮六つに至るまで間斷なからんとを請ひ、而して之を其近隣の町々に配與したりと。亦以て彼が寛永將軍的の意氣ありしを察するに足るべし。

## 家政

### 一の豫防は十の醫藥に勝る

（家内躰操の必要）

醫者に拂ふより、多く牛肉屋へ拂へと云ふ名言を實際に行なはんと欲するには、躰操に勝りたる方法はあらざるべし。腦髓の困難してたへず癇癪を起す人、食事の進まずして、青き顏色をなせる胃病患者、氣の欝がりたる神系質の人々等は、殊に醫者のさじに盛りたる藥のみにては、醫すべきものならず。たゞに病者の病氣の醫へ、壯健なる人の益々壯健なるのみならず。不思議なる運動の魔力は、人の精神を強くし、道德を高むるに大に關係を有するを知らば、老若男女の差別なく、運動は人類のつとむべきもの也。

殊に小兒は躰操の必要あり

躰操の利益は、殊に小兒に著るし。我等が市中を通行するとき、少かき息子の脊の、弓の如く曲りて所謂猫脊なるものを見ることあり。猫脊は大てい五才より十四才迄の間に起る一種の病氣なるが、恰も柔木を撓め直すが如く、早く注意して直す時は、全く醫すべし。甚だしきものを直すには婦人の手すきの如き器械を用ひ

て、脊を後へ引き付くるもあれども、大ていは注意して躰操を以て醫するを得べし。人は生れ立より右の强



く左の弱きものにてはなく、肩に高低のあるものにてもなく、脊の曲りて胸のかゝみたるものにてはなし。かくなるは全く習慣によるものなれば、兼ねての習慣に注意し怠らず躰操をなすべし。一斤の豫防は十斤の醫藥に勝るとは、この事を云ふなり。

## 娘の子と躰操

だん／＼に文明となり、學問を競爭するに隨がひ、大たいの小供を學校に入るゝ事早やきに過ぐるの弊あり。これに伴なひてその運動の時間の少なくなる事も、身躰のために一の弊害なり。殊に娘の子は飛び走りて飛ぶはをてんばとなるの心配あるより、六七才の大切の頃より、活潑なる運動を止むるの風あれども、これは心なき業なり。躰操と行儀とは、全く別ものにして、如何に躰操に上手なりとて、行儀の出來ざるとなし。もし躰操のためにをてんばとなるが如きことあらば、そは餘り一方の活潑計りに偏して敎育し、行儀を敎へざるより出づるの弊害にして、決して躰操運動の惡きにはあらざるべし。

### 如何にして躰操を爲すべきや

石炭酸を風邪の飲み薬とせば、大害あらん。モルヒチを眼薬となせば、眼はつぶれん。折角の良薬も無法の用ひ方をなせば、意外の災ひあり躰操もこれに同じく、無暗に手を動し足をはね歩くのみにては躰のためとならざるのみならず反て害あり。無法の運動によりて通常起る處の弊害は、躰の左傍に属する諸器械の發達の大に右に劣る事なり。これは右を用ゆる事左に勝りたるより起れる悪習にして、之を直さんには左右の肩を等しく上げ、或は下げ、左の手を右の肩迄上げては下げ、或は頭を右の方へ傾けては直くし、かくなす事度々なれば、左の筋は大に發達して、左右平均を保つに至る事難き業にあらず。

### 躰操は何時なすべきや

躰操を以て消化器の益を計らんと欲するには、消化器の成る丈け空虚なる時を以て、尤もよしとす。左れば凡て運動は、食後よりは食前を以てよしとす。勿論はげしき運動を爲によりて、目まい胃いたむが如きは、悪しけれども、少しの勞れ少しの痛は反て益あり。躰操は一日何時間を以て最も適當となすやと云ふに、一度に澤山するは害あれば、半時間づゝ二度になして、一日一時間づゝの躰操運動をなすを最も適宜とす。もとより躰操の目的は、躰の凡ての部分を運動せしむるにあれば或は胸を擴げ、或は後にのり、或は足を動し、或は手を動し、もしくは聲を出し、又た躰を屈する等種々に躰を動すことに注意すべし。好き健康は地球上最上の寶なるを忘るべからず。

## 冬の問題

### ストーブの破は何にて直すべき

ストーブのすき間より烟の出づるを捨てをかば、室内

は燻りてきたなくなり、人は肺を害するの患あれば、少しにても烟の出づる所あらば、早く止むるをよしとす。近來漸々に日本の家内にストーブを用ゆると流行し、少しく健康に注意して、炭火の害の恐るゝ人は、大低ストーブを用ゆれども、そのあつかひの仕方に氣を付けず、烟の出づるをそのまゝに打ちやるが如き事あらば、其害は反て火鉢に劣らざるべし。鐵のストーブは、穴のあく事も少なけれども、カーヘルとて陶器のストーブ、もしくは煉瓦のストーブは、屢々その繼目の破るゝとあり。そを直すには、浮石と鹽のセメントを以て、最も良しとす。そのセメントの作り方は、浮石を極々細かく碎きたるものを篩にて漉し、之れと等分の食鹽を混じて、水にてねり、糊の如くなりたるものをわれ目へ塗り付くる時は、長く丈夫にてあるべし。もし浮石を得ざる時は灰をふるひしものにてもよけれども、浮石に比ぶれば持ち樣幾分か悪しゝ。

### 來客に當りて第一の要件

他の事はさて置き、冬日は暖きものを客に進むるを第一とす。然るに冬は何れの家にても、煮物の腐敗の恐なきが故に、飯の如きも自然多く炊ぐ事ありて、來客の節少しく炊けば、ビショ／＼したる飯となり、多く炊げば、餘りて困る事あり。殊に冬は他の菜は温かくも、飯の冷めたる時は、折角の馳走も空しくなるべければ、かゝる時は早や蒸しの法を行ふべし。早や蒸しの法は釜に水を二合計り入れて、火をたき、沸騰したる時冷めたき飯を入れ、上よりも又た一二合の水をばら／＼とふりかけ、少しく湯氣の上るを度として、火をけし、むしをくべし。煮たてのものと少しの差なく、味良く温かくなるべし。



# 小兒を愛するに

やぎ生

父母として、誰しも小兒を愛せざる者はあらず。然れども、之を愛する程度に至りては、中々六ヶ敷して、之によりて、或は好き人物ともなり、惡き者ともなるなり。』酷愛、即ち俗に猫可愛がりとて、小兒が厭やといへばをよしといひ、呉れろといへば與へ、暑ひといへば何、寒ひといへば何、と小兒の喜ぶこと〻さへいへば、何でも蚊でも、無暗に從ひて、其喜びを充たすものあり、これ大なる心得違なり。余の知れる人に殆んど右と同樣なる養育を爲す父母あり。其小兒成長して十六七歲となりし頃は、我儘甚しく、父母を呼捨にし、父母の手内職にて得たる料金を奪ひて費消す。父母はまた奪はる〻度ごとに袖に縋り淚を流し、それを持て行ては、老父母が明日の食料なきゆへ、何卒返してといひしに、馬耳東風に聞流して袖を拂ひ、何所へか遊びゆきて、三四日歸宅せざるは珍らしからず。か〻る有樣なれば父母も少年の不在を却て喜ぶもの〻、將來を考ふるときは、心細さ限りなく、父は常にこれを憂ひて病を釀し、遂にこれが爲め世を去りけり。然るに此少年に一人の叔父ありて、彼れの父母に、小兒を酷愛するを屢意見せしが、用ゐざりき。されば叔父も其儘に打捨置きしかども、此家を訪ふときには、必ず小兒に強き意見を爲すを勉めとせり、故に少年も叔父には恐怖して顏さへ見れば逃出しけり。然るに父も世を去りて老ひたる母と少年のみなれば、捨置かれずして、これを引取り少年を懇諭せしに、もと〳〵愚鈍にあらずして敎育の惡しかりしより來せしことなれば、間もなく後悔し、父の忌日には墓に詣ふで今迄の不孝を謝び、今では中〳〵の堅人となりたり。

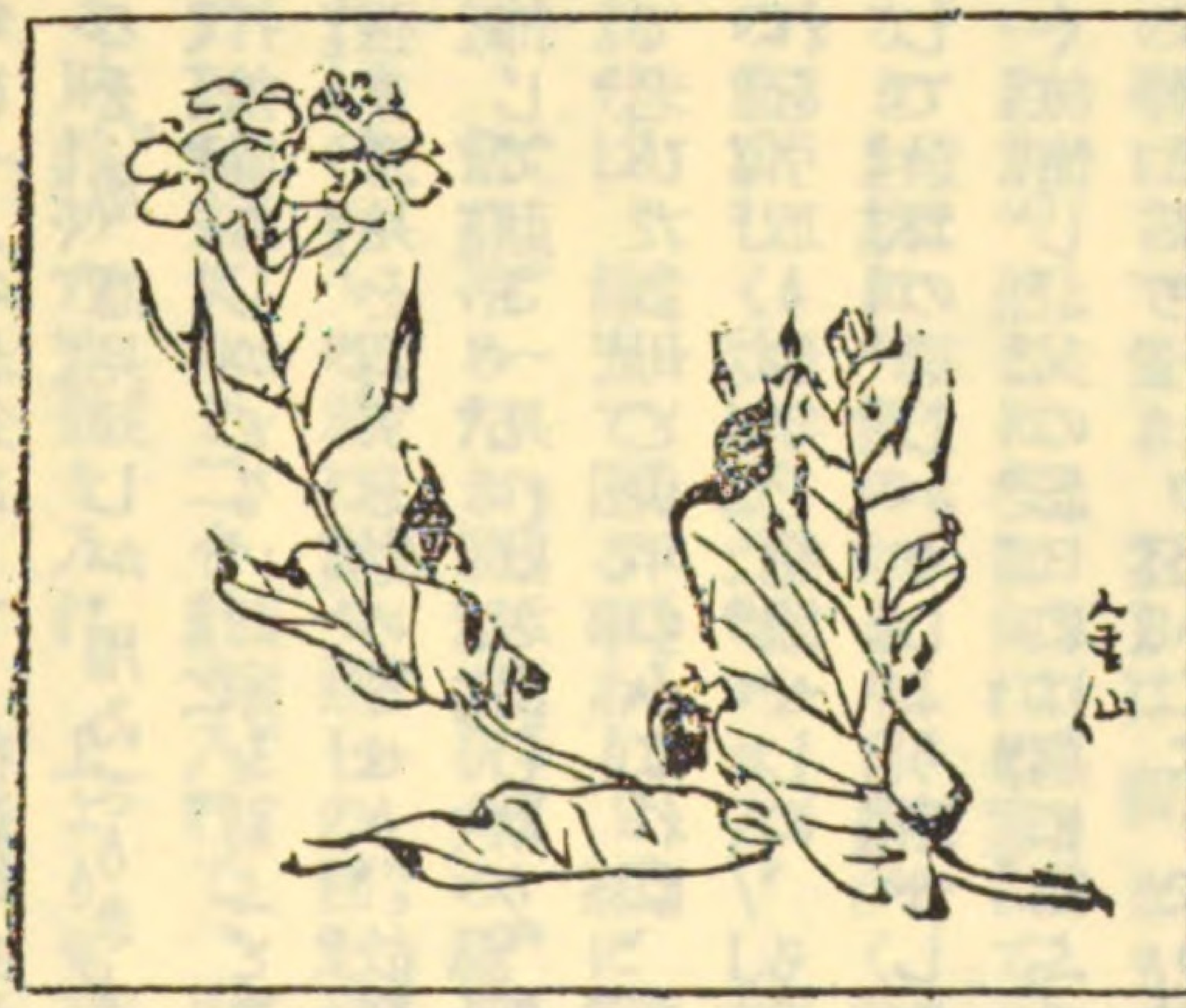
右に述べたることは、小兒を無暗に可愛がるもの〻戒

めに過ぎず。さりとて小兒の欲するもの、又は爲すことにつひて、理非も擇はず、やめろの、いかぬの、やらぬのと、禁ずることのみを命ずるときは、小兒に於ては、得られざるを欲しがるものなれば、父母の目を忍びて取出し、度び重りては、終に盜心を生じ、とんでもなき人物を養成するに到るべし。

されば小兒を愛するには、與ふべからざるものにつひては、一々説明を爲し、與ふべきときには、充分に與へ、爲すべきことは強て爲さしめ、爲すべからざることには例を示して説き諭し、其賞罰を明にすることこそ、眞に小兒を愛するものといふべきなり。

## 農事園藝の好時節

八百屋の店の前に立ち、肥へ丸りたる蕪を眺めつゝ、この美しき蕪を作りし百姓は、さぞや樂しかるらんと、うらやむ妻君よ。足を轉じて、御身裏の畑を耕し給へ。盆にも劣らぬ丸き蕪は、その畑の中にも生ずるなり。夏あつき頃、田舍に避暑して、農家の田畑に至り、青々として繁りたる、唐も



ろこしに見とるゝ少女もあらん、その唐もろこし時も、はや植ゆべき時は近つけり。

園藝の樂は一度試みし人の忘るべからざる處にして、その慰みは一時の遊戯に比すべくもあらず。その愛らしさは、生ける子供に劣らざるべし。ことに家を

持ち給ふ人々は、不意の來客に當りて新らしき蔬菜は何時にても間に合ひて重寶にして、長くをきたりとて枯るの憂ひなく、僅かの錢を投じて種子を求めば、十倍もしくは百倍の收獲を得べし。世話しき人はその手間を措み給ふもあらん。されども人は朝より晩迄働き得るものにあらず、又働くべく作れざれば、晝間汲々と働きて、夕方休みなす時間を以て、畑に下り、己が蒔きたる種子の糸の 如き二葉の出でたる間を緩歩し、或は草をむしり、或は水を灑きて、精神壯快となりたる時、食事を爲さば、人生の快樂之に過ぎたるはなけん。更らに一月二日と過ぎ、二葉は幹を生し、幹は板を延ばし、美はしき花の後に、果の結ぶべきは結び、根の太るべきは太りて、人が畑に下る毎に笑ふが如く喜ぶが如くして我等を迎ふるその物を、一つ取り、二つ掘りて臺所に持ち來り、土をあらひ、水々として水の滴りつゝあるその物を火上に炙り、さて出來上りたる時皿に盛り、家族團欒せし食卓の上に上する時は、食せざるに、已に一種云ふべからざる一種の味あり。その樂は中々に口に云ふべくもあらず、人に談し得べくもあらず、實地試みし人のみぞ、談しの意を解し得れ。

その自然の慰を得んと欲する人は、今の中より畑を耕やし、今月の十七日のひがんに至り、各々の種子を下すべし。今月上旬に蒔きてよきものは、春煮大根、萵苣、うぐひす菜、夏大根等にして、中旬よりは、ちしや、甘藷、長いも、蕃椒、扁豆、刀豆、菜種、蕃柿、南瓜、冬瓜、蜀黍、百合、しんぎく、はうれん草、等にして、之れは四月中旬迄はよし。三月下旬に至れば紫蘇、秋豌豆、冬葱、ケヤベーヂ等を蒔くべし。果木にては上旬に柿の植かへ、桑茶の肥桑の偃曲をなし、葡萄、林檎、栗、天門冬を植ゆべく、柿、栗、林檎、海棠、梅、杏、李、梨、無花果、棗、牡丹、芙容、木

柚、杜松、狹竹桃、葡萄等の接木をなすの好時期なり。

農家の世話しきはこれより始まりその面白きもこれより、始まる。園藝の秘訣は晩き過ぐるより、早や過ぐるを宜しとすれば、時節に晩れざる樣注意すべし。殊に東京の如きは早く下霜の恐れあるを以て、時の早やきに過ぐるはさわりなけれども、遅きに過ぎて霜に遇はゞ、早成にして霜かるゝ等の恐れあれば、時にをくれざる樣注意すべし。

春煮大根は別に手間も入らず、たゞ畑を耕やして、一尺四五寸づゝ間を明けて畔を作りその畔の低き處へ蒔かんとする大根の種子をパラ／＼と重さならぬ樣に散じ、その上より高き處の土を覆ふべし。かくて廿日もたゝば二葉を生ずべし。その時に至り餘りに込みたる處は拔きて、摘み菜にして用ひ、殘れるものは倒れざる樣に、兩傍より土を培かひ、又た温かき時に時々水を濺ぐべし。人糞は能く腐敗せざるに用ゆるに却て害あり。ながしの先きの溜水等は、最も良き肥なり。素人にては兎角丸く太く作るに困難なれども、之を植ゆるに當り畔を深く掘りて、掃き溜の塵の腐りたるもの等を入れ、その上に少しく土を撒き、その上より種子を蒔く時は、大に發達よきを得べし。又土は深く耕やして、柔くなす程根の延び樣直くして、所謂すなをなる大根を得べく、土の固まりたる時は、根に枝を生じて、いぢの悪しきものを得べし。ちしや、うぐひす菜、夏大根菜種しゆんきくほうれん草等も蒔方之に同じ。

馬鈴薯、唐辛、柿、百合、瓜類、冬葱等は、一二ヶ月の後に至りて、苗を農夫より買ひて、植ゆる方、反て能く出來る事あり。それは是等を種子より蒔かんには、温かき床を作り、また寒夜には霜の保護等を要する事あればなり。

豆類は最も手の入らざる菜蔬にして、畑の端尋、凡そ一尺四五寸を隔て丶、棒にて二寸位の穴を掘り、その中へ蒔かんとする豆を、二三粒づ丶入れ上より土をかけをくべし。時に遲れし時は穴を淺くし、時候の未だ早や過ぐる時は、穴を三寸以上に深くすべし。蜀黍も豆と同じく、二尺位の間をあけて、穴の中へ蒔くべし、慾を餘りに込みたる時は、果の生成あし丶、慾は損なるを忘るべからず。

百合は五寸位の間を隔して、五の目に植へ、時々肥をなすべし。賣買に付してもその收入夥しと云ふ。チヤベージ西洋料理のロールにして食し給ふ人々は、その味の美なるは己に知り給ふ處なり。只だ之を湯出て、牛肉のあしらひとし、もしくは湯出たるものに酢を掛けて用ゆるも隨分さつぱりとして美なり。これは種子の良きものを撰ばざれば、徃々にして出でざる事あれども、生へ出でたる時は、玉菜の名にそむかず、圓き玉となる。或る地方にて葉牡丹と云へるは、即ちその狀より云へるなるべし。庭前に植へて、花の代用として、見苦しからず、之を植ゆるには、温かき土地を撰びて掃き溜のごみをしき、その上より能く篩ひたる土を、五分計りの厚つさに散き、その上へ種子を蒔くべし。種子葉を生じて、二寸位になりたる時は、更に、植へ變ゆべし。移さゞるものは玉柔かくて、早く開き、食用として美ならず、一度ならず、二度、三度、位は移すを宜しとす。

接木偃曲法などは一寸素人にてはなし難く、又た紙面にては習ひ難ければ、玆に出さず。これは法方の外に大に熟練を要すべければなり。

## 料理法

### 鯛の美しき皿

鯛の料理方は屢々見る處なるが、西洋料理中にても最

も勝れたる一方を記さんに、丸々と肥りたる蠣二十四計を、焼き鍋に出れて、蠣より出でたる水にて二分計りの間沸騰せしめ、蠣の餘りに小さく、又た堅くなり過ぎざるを度として、その汁を捨てゝ、更らに新らしきパンを一時間計り牛乳の中にひたせしものと、雞の肉を小さく砕きたるもの、二種を混ぜ合せて、糊の如くドロ／＼となし、之を目の細かき篩にて漉し、その中に一二個の雞卵の黄味と、小量のバタとを加へ、先きの蠣をそのなかに充分ひたし、さてこれを引き上げて、パンの細粉の上に轉はせば、クルケツトの衣の如くなるを、油を引きたる鍋の中にて焼くべし。

更らに勝りたる一方

焼きたる蠣よりは、煮たるものを好む人あり。時には煮たるものも、焼きたるものに勝る事あり。鍋の中に蠣より出でたる水を入れて沸騰せしめ、能く沸へ上りたる時、蠣をパンの粉の上に轉ばして、衣の付きたるものを投ずるに、二三分間にして再び沸騰すべし。その時蠣のみをそつと引き上げ、殘れる汁を砂糖、鹽望によりてはバタ、胡椒等にて味を付け、その汁の中へ、狐色に焼きたるパンを投じ、パンの柔かくなりたる時、破れざる樣に引き上げて、皿に盛り、その上に先きの蠣を並べて食膳に供すべし。又た焼きたるパンを汁の中へ入れずして、固きまゝにて皿に上せ、その上より汁と蠣とをかけて出すもよし。

鯛めし

鯛の大骨を去り、肉と小骨を程能く焦し、骨も身も共に出刃庖刀の脊にて斬りたゝき、指にて摘み、骨の砕けざるものは取り出だし、之を擂鉢にて擂りて細末となし、上より味噌と、砂糖とを加へて、好き程に加減し、少量の水にて解き、トロ／＼となりたるを度とし、鉢にうつし、其中へ少量のさしみの小さく切りた

る者を入れてうかべ、さて別に飯の煮立ての熱きものを茶碗に盛り、その中を箸にて穴をあけ、穴の中へ先きのさしみを入れ、是よりその汁をさじにて掛け、食膳に供すべし。

### 汁の身の半氷豆腐

半氷豆腐は、汁の身とし面白く、味もよし。之れは客を招かんと欲する前日とうふを一寸角位に切りて沸騰せし湯の中に入れて、一寸沸立て、さて引き上げて籠か、みそこしの如きものに藁を敷きて、その上に豆腐を並らべ、竹の先きに付けて屋根の邊に出しをかば、此頃の寒さにては見ごとに氷るべし。時候温かき時は、豆腐を紙につゝみて焼灰の中にて焼くもよし。

### 泡雪はんぺん

鯛、平目、若しくはこちの如き類の魚を、三枚におろし、骨を抜きて庖刀にてたゝき、碎けたれば、擂鉢にて擂りつぶし、その中へ雞卵の白味計りを入れて、擂り、茶筅にて泡を立たせ、鉢の底迄泡になりたる時、ぐら〱と白湯の沸き上りたる鍋の中へ、泡を一さじづゝ、すくひて入るべし。之れは汁の身となし美味なり。

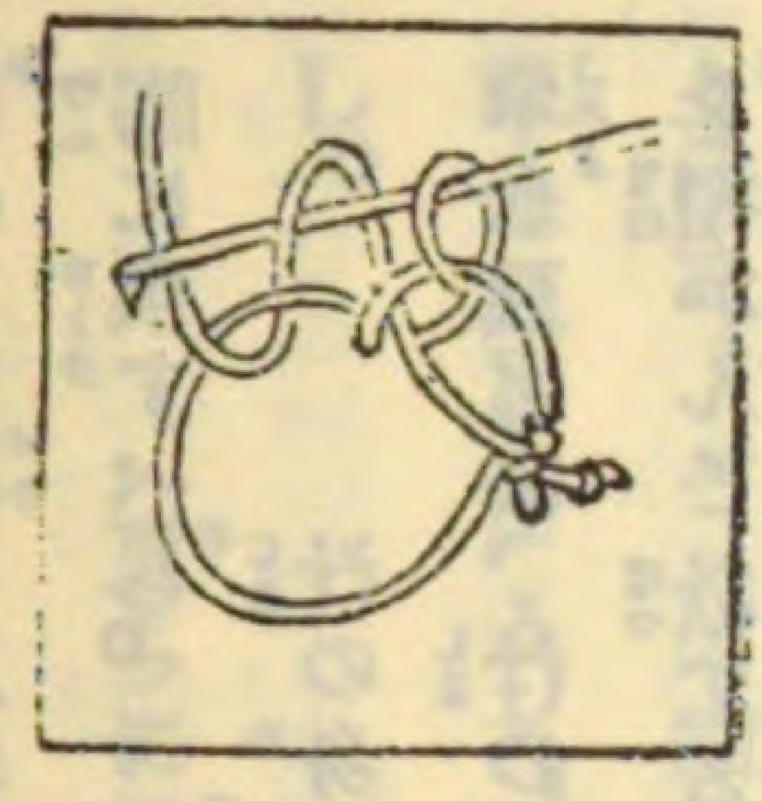
## 手藝案内

### 毛絲細工一二種

手藝中にても毛絲細工ほど數多きはなし、若し勸工場邊に行き小間物店の前に立止まりて一覽し給はゞ、毛絲の一條が樣々なる形を爲して諸君の前に陳列しあるを觀せらるべし、小兒の帽子、シャツ、足袋、よだれ懸、頭巾、靴襪等諸君の需に應じて容易く購ひ得らるべし。其他菓物又は草花等の細工物ありて重に床の間の飾物と爲す、赤や黄や綠や紫や其他色々の毛絲を

もて製作せらるゝ製作物の綺麗美觀甚だ人の眼を喜ばしむるに足る、然しこれは實用にならぬものであれども一種の美術品として世上に求めらるゝもの尠しとせざれば其中一二種誰でも毛絲心ある人は容易に製作し得らるゝ細工物を記すべし。

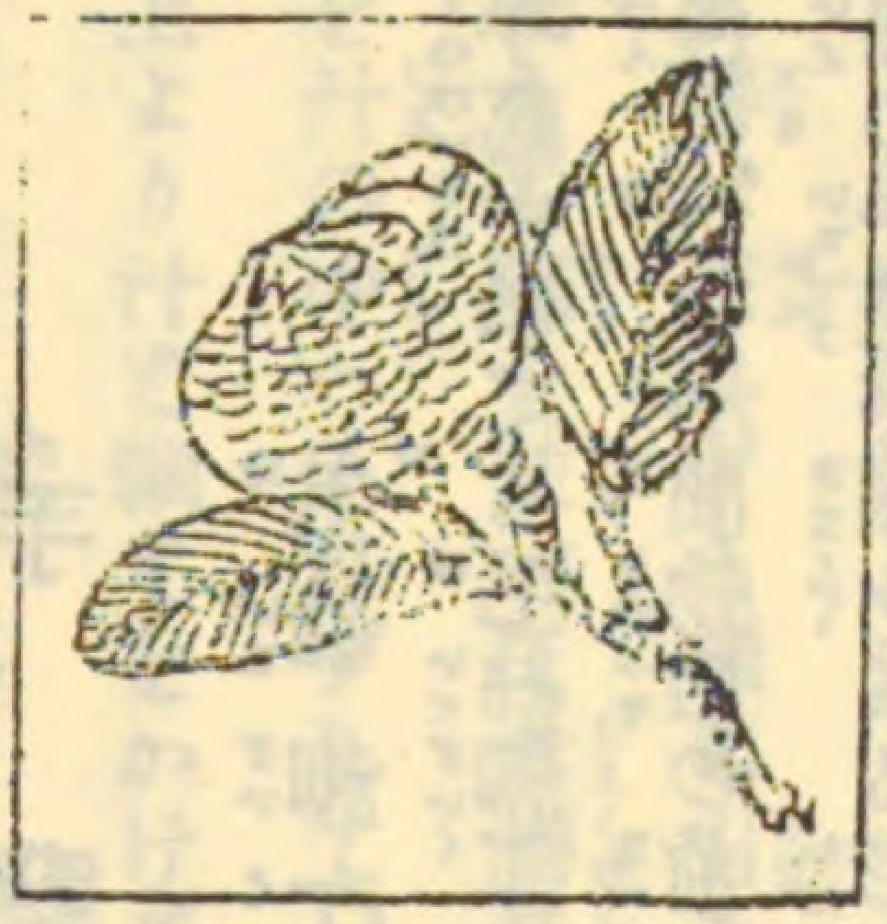
素より賣物は機械の力に依りて製作せらるゝもの多きゆゑ其外見頗る美麗なれども手製は夫程迄は行かずとも熟練に至れば機械製の賣物におさ〳〵劣らぬ品物を製し得らるゝに至らん、さてこゝに水菓子の中、枝折蜜柑の細工物を擧せんと欲す、それを製するには黄色の毛絲を以て甲圖の如く始め輪を拵へ置き其の周圍に五つ六つの鈎編をあみ、次に毛を堅く引きしむるなり。夫より右へ〳〵と編み行き編み廻りて蜜柑の實とすべき大きさの玉を造り、其中に綿のやうなる



甲圖

柔かなるものを詰め込みて丁度蜜柑の恰好に脹くらしめ、其の編仕舞の處則ち中央より銅線をさしそれに紙を卷きつけ程能き大きさに至れば別に毛絲(綠色でも他のクスミ色にても宜し)を卷きつけて枝の狀を爲し、

これに兩方の葉を附くれば乙圖の如き枝折の蜜柑を得らるゝこと甚だ容易なり。」



乙圖

次に葉の編方につき一言せん、葉の編方は中央の大筋則ち立筋より編はじむ(勿論毛絲は綠色を擇むべし)、尤も最初に大凡葉の長さを定め置き其の長さ丈に連鎖を編み置き而して其の葉の左より編み始め右の方へと編み行き終るなり、且つ其の葉の裏面を右より始め左にて編みおさむ、これをきつく締めて葉の先を尖らして葉の形を爲し、又葉の色と同じ色糸をもつて銅線を卷き之を葉の中心にタラに

刺通し、其下の方より適宜の大さとなるまで、其上より紙を巻きつけ、又葉と同色の毛絲を巻き實を持つ枝に附け置き又枝と同じ色毛にて巻き置けば蜜柑の葉と枝と實ある細工物を得べし。筆の序に花類の編方を記さん、譬へば牽牛花を製作せんとならば、先づ最初に花の根より寄連鎖の法によりて次第に上の方へと編みあげ又た目を増して編み擴げ牽牛花の形に編み上ぐべし(毛絲の色は其人の好々に任せて可なるも赤、紫、鰕色等は先づ牽牛花の色なり)これに黄色の毛絲を用ゐて花蕊を拵へそれよりヘタを編み作るなり(花類には必りずヘタを附くる事を忘れ給ふべからず)又銅線に毛絲(綠色)を巻きて恰好を作りて蔓と爲し、それに二つ三つ未だ咲きやらぬ蕾の花をつくるも面白く且つ三四の葉をも附するは勿論なるべし(葉の編方は大抵前記蜜柑の葉と同様なれば略す)

凡て是等草花類及び水菓子類の如き細工物を造るには別に一々雛形もなきゆゑ、其人々の適宜に任せ工夫を凝らして何か新機軸を出すも面白き業ならずや、斯の如き製作物は機械的に指頭を動かしてのみ出來得べきものにあらず、必らず多少の智惠を要するものなるゆゑ、小兒の時より斯様なる毛絲の手藝を習はせ置かば、其益啻に毛絲細工の藝術を得るに止まらず知らず識らずの間に智惠の發達を助くるもの蓋し少々にあらざるべし。

## 洋服寸法

「ヅボン」の裁縫の事は前號に記したり、本號には寸法を取る事につき聊か陳述する處あるべし。和服裁縫の寸法は先づ丈、袖丈、身ごろ奥身等甚だ短簡なるものなれども、洋服に至りては中々左様なるものにあらず、寸法甚だ嚴重にして、和服の如く兄の衣服を弟が着て

も、親の讓物を息子が着ても左程見苦からぬ比にあらず、其代りに洋服の寸法其宜しきを得たるものは身體にシックリと合ひて躰裁甚だ宜しきものなり。

さて寸法を取るには前號に記せし「インチテープ」と申す至極調法なる尺量を以て身體を測る、第一「襟廻」りと稱して頸の周圍を測る、第二胴、胴を測るには上胴は乳房の邊を測り下胴は腹を測る、これは幅と稱し短衣を製するに必要なり、先づこれが寸法中にて最も大切のものにして他の寸法の基礎ともなるべきものなれば最も用心して測らねばならぬものなり、則ち「インチ、テープ」をもて腕下に躰の周圍に廻はし密くしめて指頭もて押へ、其人に二三度息を強くさせ段々指を弛めて息の呼吸に從ひ、其人が胸に苦しきを覺えざるまで尺を弛めるなり、而して其弛めし丈の度を以て胸の寸法とは爲すなり、又下胴も「テープ」を廻して寸法を取る（但し全備躰の人は下胴は上胴より三「インチ」短く、譬へば上胴則ち胸の十九「インチ」あれば下胴十六「インチ」なりといふ）第三丈、丈に前丈と後丈とあり、肩より臀に至る前後の丈を測る、これは人々の前曲と後曲によりて若干の差異あると知るべし、第四袖附廻り、則ち通常『鎌』と稱する腕の附根を測る寸法なり、これも隨分大切なるものなれば、此寸法を定むるには、其人に杖か書物樣のものを腕の下に挾ませ、然る後に其杖或は書物の處まで度を測り下る時は精密に鎌の深さを知る、此寸法は胸の三分の二が通例なれど、肩の高低によりて一定せず、第五前巾、後巾（胸の前後）第六行、行は袖の長、第七袖口は腕首の處を測る、其他は前號「ヅボン」の裁縫に記せる如く股下、股、臀、裾口等の寸法を測るべし（前號參照）。

斯の如く寸法の測量甚だ複雑するものなれば、未だ熟練せざる中は寸法に誤謬を生ずる事往々なり、故に熟練に至るまでは紙片等に寸法を定め、それに準して

裁縫し誤謬なきに至らば始めて實地に試み、先づ小兒服の「ジヤケツト」位より始めて、大人の「ヅボン」が出來るやうにもならば、短衣、上衣其手に任せて裁縫すべし、短衣上衣等の裁縫に至りては追々記述することあるべし。

## 社交一斑

### 流行の栞　　春夢

#### 二種の足袋

これ迄は大人の足袋は紺と白に限るやうでありしかども、近來は色々なる新發明の足袋行はるゝに到りぬ、赤坂邊にて製造し始めたるは石川足袋といふものにして白、紺は勿論緋もあり表裏共に用ゐらる即ち表が穿けなくなれば裏を引返して穿くといふ功能はあれど、使用したる者の話に餘り足袋が理窟染みて面白からず、裏を引返すといふは一寸實用に適ひて宜しきやうに聞ゆれども、白などは裏に膏のやうなものやら汚穢のやうな物つきて功能書ほど實用にならずといへど、弗々使用し居る人を見受くれば先づ〱流行ると申しても宜しかるべし、これは勿論一昨年頃の發明に係り其新聞廣告等を見るに代價も差して普通足袋とかはらず、奇を好む人は一番履き試むるも損はなかるべし、次に近來の發賣にして弗々好奇人の使用と見受くるは瓦斯織の足袋にして底地は普通足袋とかはらず雲齋若しくは石底を用ひあれど表は瓦斯絲織の珍柄を用ゆ、其縞柄實に珍奇變妙にして外觀亦之に適ひ體裁甚だ佳美なれども如何にせん實用に乏しき憾あり、之を履きて書生一たび高下駄を履み鳴らせば忽ちにして鼻緒の所に裏地を顯はすの恐ありて荒ッぽい人体にはさても〱の品と知るべし、矢張一般の流行は舊來の紺と白の足袋にして、中にも男子には紺の勢力九分を占め世は何事も黑の世とはなりたり、而して黑の流行は施いて婦人にも及ぼし紺足袋としやれる女中衆もありたれど餘りイカつきものなれば今は全く廢れたり矢張り婦人には白の「キヤラコ」製か絹製のもの最も勢力ありと知るべし



足袋二種

#### 流行の風呂敷

風呂敷には種々なるものあるべし、中に就き最も多く見受らるゝは八

寸の垂箱掛には縮緬若しくは壁縮緬に松竹梅又は鶴龜又は高砂の翁嫗等を模様したるもの。莊嚴風呂敷は蓮花を模様したるもの限れるやうなれど厚き織地に金絲もて其家々の定紋を縫ひしもの又行はる、紋の大きさは餘り大ならざる方を宜しとなり

### 櫻簪

「世の中にたへて櫻のなかりせば」ア、彌生の候はソロ〳〵と來り櫻の花も間近くなりぬ、此度人形町豐年屋には美術學校生徒の意匠を得て生花造簪を製造し本月より弗々賣出し始めたり、其價は一錢五厘より五十錢迄種々なる新形を發賣せりと

### 流行の「ステッキ」

今日の流行は柄の處に意匠を用ゐず「ステッキ」全體に精密なる彫刻を用ゐし者を第一の流行と申すべし、是迄は柄に幾多の修飾を爲し或は象牙或は鼈甲或は珍木或は金銀鍍製の犬の頭等を附したれども目下の流行品は眞直なる支那竹に花鳥風月か雲龍、虎竹の如き勇ましきものを柄の所より先に至るまで總彫したるものか舶來棕梠の木の頭に銀鐶を嵌めし單純なるもの流行す、是迄は多くの紳士はヒチ〳〵したる花草なる模様のものを用ゐ來りしかども、今世は物騷の世なるにや手頃の岩疊造の自然木や櫻木の仕込杖を持つに至るとは淺猿き世や

### 當世風の髪

昨年秋頃までは丸髷島田髷共に鬢短く髱長きが流行なりしが昨今は全く反對となり鬢長く髱短かなる方大に流行且つ根も凡そ頭の中央より少しく上の方に結ひ來りし處近頃は稍根の下りたる方流行となれり又丸髷は大なる方流行なり島田は中高にて高尚なる方流行銀杏返しは不相替流行なるが輪の大ひなる方なり又目下十三四歳の少女桃割れといふ結ひ方流行なし是は銀杏返しをふつくり結ひしものゝ如くにて元結の掛らぬ迄なり三ツ輪、天神髷、唐人髷等ははやらぬ方と知るべし

### 下駄と雪駄と

昨今流行の履物御覧に入れ候はん品々を記さんに表附駒下駄類は桐の品少に連れ益々高直に至り昨今の處にては一昨年に比して殆んど倍價となり即ち表附駒下駄極安物金三十錢止り並品金五六十錢流行は金壹圓内外の處にて男物は絹物の鼻緒女物は年増用に鼠利久中年増に雪の下櫻鼠藤鼠鳩羽色銀鼠新造向には今紫藤色草色等買口最も宜く直段は南部表上等横柾塗男女物共に金八十五錢位又女物に塗鑑造々隱居用者多く東下駄も亦買口宜し直段は黒本堅地塗小町形道島形跡丸形共本天八分鼻緒南部表付極上金一圓五十錢上等金壹圓東下駄は黒本天八分鼻緒南部表付極上等金一圓上等七十五錢並品金五十錢又金梨地木目ヒタン時雨塗等の上等塗に南部藤表附にて鼻緒は皮色の八分本天にて金一圓五十錢より二圓迄少女用には昨今塗臺流行

なし一銖に上等品を望み即ち本蒔繪高彫等表緋本天付金七十五錢位又硝子入にて七寶押繪細工を仕込みしもの四五年の處に流行なし金五十錢位のもの賣行よし又此頃東京市内は頓さ雪駄の世さなり數年間も全廢せられし故、此職人甚だ不足を告げ小賣店にては品拂底なりさ聞けり、斯く本品の流行に至りしは歩行の輕便なるさ經濟上にも利益ある故にして、昨今は蠣殼町邊の仲買店より一般商家の番頭小僧に至るまで雪駄ちやらつかせ學校生徒も此流行に感染したりさ其最も流行なるは男物にて絹羅紗、變色革鼻緒にして女物は惣して派手なる本天なり、而して其價は男物二十錢内外より一圓五十錢位迄女物十五六錢より八九十錢迄なりさいふ

## 流行羽織紐

此頃新規の流行さも申すべき羽織紐は太き絹製丸打二重のチョクキリ結びにして其形は大概圖の如し、流行色は白を第一さし鐵色、黒色錆色等之に亞ぐ(代價心入絹包みは十五六錢より純絹製は四五十錢さ知るべし)、書生の羽織は相變らず太き白の長紐、近來小學生徒に至るまで少さき羽織に二條の長紐をブラリさ下がらせける、



二重結び

## 自轉車

近來都下に自轉車乘者の繁殖したるこさ誠に驚くに堪へたり、自轉車流行の傾向は昨年二月頃記載し置きたるが、果して近來の大流行さなりけり、大流行の結果は遂に都下に日本輪友會なる團體を組織し、事務所を京橋區南鍋町二丁目交詢社に置き、大に此道の擴張を計り、都鄙共に其會員さなりしもの尠からず、多くは紳商紳士連なりかるが故に東京府市部會は自轉車に課税するの決議を爲し、京都府に於ても自轉車を使用するもの四百輛以上に及び尚ほ追々增加の傾あるが故に、自轉車使用者へ特別税を賦課せんさの動議を起し、可決の上客冬京都府知事へ建議したり、東京はそれよりも流行甚しく、輪友會は昨年より屢々自轉車にて遠乘を試み橫濱、江島、大磯、千葉等に赴けり、又第一回(上野公園を發し芝公園に至る)第二回(川崎往復)の郊遊を終りたれば是より屢々遠征を企つべしさなり、輪友會の言ふ所を聞けば自轉車の効は娛樂、健康實用の三德を一時に得るにありさ、左もありなん、然れども自轉車の價は廉なるものにあらず、尠くさも中等以下にては購求し得べきにあらざるが故に賃貸を業さするものあり且つ自轉車修繕を爲す所あり、則ち神田區錦町三丁目吉村方、同區相生町(秋葉原傍)岡本方、同區錦町一丁目梶野方を其重なるもの



サイクリスト

さす、岡本方は目下大形及安全車二十餘臺を備へ、梶野支店は安全車十二臺を有する外、特に他に練習塲を設け、吉村方は十數臺を備へつけ、何れも時間と車によりて一定の貸料を科して練習者の用に供す、製造塲の重なるものは、本所區菊川町の宮田製造塲と福淵高島町の梶野製造所なり、芝浦製造所に於ても此頃より廣く自轉車修繕の注文を引受くる由、然れども自轉車を使用する紳商紳士は、外國(英國ロドンン「コベントリー」製造會社)より取寄するもの多しと。

## 流行の状袋

如何なる書面袋が流行なるかといふに別段一風變つた新形もなく矢張状袋は縱長にして上より書状を容るゝは從來の形なるが先年專賣特許と稱し天地を明け中央より書状を收むる趣向にして中に一枚の半切を添へしもの、これは開封を防ぐ用心なれども一體書状は至急を要する塲合多きが故に天地中央の三個所に糊を貼するは隨分面倒臭き事なれば餘程の好事家の外は用ゆるもの稀なりしさて其後は目に立ちて流行となりし新形なく目下状袋社會を壓倒する勢力あるは例の二重状袋にして下なる紙は粗末なる洋紙に花鳥風月を摸樣し其上を雁皮紙にて蔽ひ一寸體裁宜しく價も廉に(百枚七八錢より十二三錢)且つ風流にも見ゆれど實の處は餘り風流なるものにもあらず何となくコセコセとして品格乏しく婦人用としては差して見苦しからざるも旦那樣向には不釣合なり又婦人用としては優美に乏しくそれよりは他に短冊風に淡色を抹したる方頗る風流なりされば此風を用ゆる女流を多く見受らる男子用には極上江戸川の中形流行の第一位を占む(百枚二十錢より二十六七錢の處)大形は何となく山師らしくもあり官省用にも見ゆる嫌ひより多く行はれず一時流行せし江戸川又は洋紙の西洋形(方形)は全く廢れて年始に「カード」を贈りしものより外に顧るもの稀なり鳥の子は墨附惡しく墨の乾きも宜しからざる所より且つは從來印刷局にて不用の鳥の子紙安價に拂下げ來りし故此不用紙に製する状袋は案外安直にてありしかば一時流行を極めけれども今は拂下げなき由にて價格も江戸川に劣らざるを以て俄に不印となりて了りぬ却說江戸川紙製状袋の中にても風流人は曲尺横二寸上下縱は內なる状紙に五分許を剩して開緘に便ならしむ而して状紙は第一模樣入雁皮紙第二に模樣無し江戸川紙流行なれと状紙流行の委曲は他日に譲るべし

## 日用品物價

◎白米(一圓に付)●一等米九升●二等米九升二合●三等米九升五合●四等米九升九合●五等米一斗〇三合

◎雜穀●南京大豆一斗九升●南京背大豆一斗九升三合●同溜色小豆一斗三升五合●八戸大豆一斗九升●納鹽瀬色小豆一斗二升八合●室蘭黑豆一斗七升●日無白さヵ升八合●本石大豆一斗九升●地廻蚫小豆一斗三升八合●當金々時一斗五升五合●南赤大豆一斗九升三合●川越白さ一斗〇五合●本塲平豆一斗六升●川越毓豆一斗五升五合●鍋臘元一斗四升●吉原大豆一斗七升●室溜小豆一斗二升五合●中手小豆一斗四升五合●本塲塗墨金時一斗三升●銑子臘元九升●庄内平豆一斗十升五合

◎鹽●赤穗三俵七分五匣●大鹽弁に八家三俵八分●本寄六俵一分●新寄七俵

◎繰綿●三州上銘大入七百五十五目●三州文庫八百三十目●遠州文庫八百三十目●唐白上綿八百五十五目●赤綿大德一貫三百七十目

# 雜録

## 遺珠類々

○貧と無學　ピーチャル

貧は恥辱にあらずと雖ども、無學は即ち恥辱也

○宗教　ストーカル

宗教は何人に取りても(一)單に信仰たるのみならず、亦實驗たらざる可からず(二)制禁たらずして、鼓吹の源たらざる可からず(三)來世の保險にあらずして、現世の綱領たらざる可からず

○忍耐主一の要　古諺

しば／＼轉ずる石には苔生へず

## 食物消化の時間

食物消化の時間に遲あり速あり。一二を擧ぐれば、

三十分のもの　犢の煮汁。

一時間のもの　米。家畜胃腑。

一時半のもの　甘熟生林檎。半熟卵。野獸焙肉。ゆで羊肉。炙麥麵包。大麥ソップ。

一時四十五分のもの　サゴー米。

二時間のもの　生卵。フルパン。炊大麥。醋付生キャベツ。沸としたる乳。

二時十五分のもの　燒鷄卵。生牛乳。

二時半のもの　燒馬鈴薯。炙雁。煮キャベツ。犢肉フライ。ゆで七面鳥。小羊焙肉。とき肉鮓。煮林檎。生キャベツ。凡ての野菜。

二時四十五分のもの　雛鷄フライ。焙乳卵糕。ゆで牛肉。

二時五十分のもの　酸堅生林檎。

二時五十五分のもの　生蠣。

三時のもの　ゆで鷄卵。ゆで魚肉。鹽豚のスチュー。焙牛肉。

三時十五分のもの　新パン。炙羊肉。炙牡蠣。煮豚蹄。

三時半のもの　牛酪。乾酪。ゆで蕪菁。ゆで人參。煮馬鈴薯。煮鷄卵。蠣のスチュー。

三時四十五分のもの　煮蠶豆。青き玉蜀黍。煮甜菜。

四時のもの　煮甜菜。煮鹽鮭。焙燒鳥。牛肉フライ

四時半のもの　野禽肉。

## 爪を嚙む癖

佛國醫學士ベリョン氏が實地研究七年餘の結果として、爪を嚙むの習癖はたとへ之を病氣といふと能はずとするも、少なくも神經組織衰弱の兆なりとて、一篇の論文を公にし、同國醫學社會の注意を惹きたるよし、近刊の國民新聞に見ゑたり。其記する所に據れば、ベリョン氏はヨーン縣の男女合級學校にて試驗せしに、男童の嚙爪者は二割、女兒は五割二分、セーヌ及ひマルンの男學校にては

| 年齡 | 全體の數 | 嚙爪者の數 |
|---|---|---|
| 十二—十四 | 十八 | 七 |

| | | |
|---|---|---|
| 十三—十五 | 十六 | 六 |
| 十五—十七 | 十八 | 三 |
| 總計 | 五十二 | 十六 |

十二より十四まで殊に此癖ある者と見へたり。女兒に到ては更に著しきものあり。

| 年齡 | 全體の數 | 爪嚙者の數 |
|---|---|---|
| 十—十三 | 八十 | 二十七 |
| 十二—十五 | 七十五 | 二十一 |
| 十五—十六 | 五十二 | 十三 |
| 十六—十七 | 十 | 二 |

右調査をなせし諸學校の報告によるに、此爪を嚙む癖ある生徒は必らず最下等の學生にて男兒なれば女々しく、女兒なれば怠慢に其無氣力なることと著しく、注意力も確固ならず、其書く文字も概して正しからず。巴里手藝學校教師の言によるに、爪嚙む癖ある生徒は尤も敎へにくき生徒にて往々手藝の敎育を受くるに不適當なる者あり。尤も驚く可き記臆力若くは或藝或學科に特別の長所ある者許には爪を嚙むの癖ある者多けれど、斯る者は或一部の不釣合に發達したる者にて、即ち神經組織の正當なる發達を誤れる者にて、成年に到つては多く其特長を失へり。六歳より八歳までの兒女にて尤も頑鈍なる者は殆んど皆爪を嚙むの癖ある者あり。要するに爪を嚙むの癖ある者は智識上道德上何れも劣等なる者なり。

斯る癖ある小兒少女は之を一處にまとめ、英國感化院にて適用するものと同樣に特別のしつけ及衞生上の處法を應用し、元來此癖は即ち少女小兒の神經組織の衰弱の徵なれば先づ適宜の食物運動其他によりて彼等の神經組織を丈夫にし、然る後(一)外部の感覺によつて不意識的の行爲を意識的のものとなし(即ち指ににがきものをぬる等)、(二)反動的自動傾向をつくり、(三)少女小兒の注意を強む可しと。

# 恩を知れる徒への報酬

## (ジュリヤンの事)

ジュリヤンは貧しい指物師の悴でムイましたが父親は極難澁の中に幼きジュリヤン一人を跡に遺して相果てましたが世に人鬼はないものでヂュラックと呼べる一人の素封家がありましたが可憐の孤兒ジュリヤンを慇然に思ひ父親の職業を覺えさせ其跡目を續がせんものと寄宿學校へ入學て呉れました光陰に關守なく本年ジュリヤンは十六の春を迎へましたが一日ヂュラックはジュリヤンを吾家へ呼寄せましたが其時一個の貨幣入を取出しジュリヤンの目前に置きまして「偖ジュリヤンや今日が日まで汝の行狀が正しいので寄ると觸ると誰も皆感心な見だと汝のことを

賞讃して居るが私も誠に肩身が廣く世話の爲栄があると云ふもので此様悦ばしいとはないが此上共に折角此迄の様に爲てお在よ茲に少許の資金があるが此れは佛蘭西を漫遊する路用として汝に進げるが天晴汝の職業を成就させんとするには旅へ出で修業をせんければなりません善は急げだ夫れでは此時から旅へ出で随分共に身体を厭つて天晴腕を磨いて來るが宜イ幸福と云ふものは正直な人にばかりあるものだから若しも汝が他日成人して幸福な人となり度いと思ふなら矢張正直な人で歸ッてお入來」

ジュリヤンは恩人チュラックと別離に臨んで泣々知らぬ旅路へ出立致し夫れより五箇年の間旅から旅を致しましたが始終一心不亂に職業を勉强致し立ッ鳥は跡を濁しませんで行く先々での行状は誠に正しくムイましたが最早今では一通り修業も積みましたが故郷の空懐かしく愈々歸りと覺悟しては吾が生立ッた故郷の地を踏むのが待遠しく別けて吾が恩人に逢ひ度いので一日千秋の思ひをなして居りました

併しながらジュリヤンが吾故郷の村へ歸着きまして恩人のチュラックが急病にて死去ッたとを承りました時のジュリヤンの愁傷は如何ばかりでしたらう

ジュリヤンは悲嘆の涙に掻呉れ數日の間は泣くより外はありませんでしたが漸くにして氣を取直し職業に取掛りましたジュリヤンは無一物でムイました併しながら多年勉强の功を積み職業に掛けては何處へ出しても負を取りませんので諸方から仕事を頼れましたジュリヤンは險約に慣れて居ますので追々吾が職業の收入で佳き住居に住へる様になる迄の處現今では一個の小さい窖を借りて住ンで居ました

夫れより日數幾日をか經て一日のとジュリヤンは恩人チュラックの相續人達が當地へ到着し而してチュラックの遺物なる諸道具類一式を賣拂ふと云ふとを傳聞きまし

てジュリヤンは其場所へ立會はんとて出懸けて行きました是れはジュリヤンの物數奇で參ッたのではなく生前吾が恩人の住ひ玉へる跡の慕はしくて出懸けて行きまして早や其家に着きましたが懷舊の情に胸一杯になり兩眼は涙の露を含みました

頓て恩人チュラックの姪と甥とが生前彼等に優く致しました叔父の紀念品なる諸道具類一式を賣拂はんとするのを今目前に打見遣りましたときには悲痛に憤懣を混淆ましたがジュリヤンは獨語「ア、私が若し彼人達の地位に居たらば故人チュラック殿の遺物を大切に保存して永く紀念と爲樣ものを」

今しも此家を立去らんとせしが「額一面三法！」と云ふ呼聲を聞附けしときのジュリヤンの憤懣は何程でありましたらう！這はコレ外ならぬ吾が恩人チュラックの肖像を額に致したものでムイました

始終の樣子を見て居ましたジュリヤンは堪り難ねて獨語「彼等の叔父の肖像を賣拂らうとはア、何たる恩知らずぞヨシ／＼其儀ならば私が一番彼品を買取ッて遣らふ私に彼程の厚い慈悲を懸けて下さつた恩人の繪像を名も知らぬ他手に渡して宜イものか」

ジュリヤンは身代振ッて唯ッた五法の貯蓄しかありませんでしたが今は何條猶豫のなるべき吾が持合せの五法と引換に額面はジュリヤンの所有となりました

ジュリヤンは急はしげに壁間より額面を取外しましたが温顏を以て幾度か微笑み玉へるコノ口ジュリヤンを救はんとて幾度か開らき玉へるコノ兩手に接吻するとを禁じ得ませんでした

ジュリヤンは件の額面を吾が住へる窖の内に掛けんとて吾家を指して持ッて參ります道すがら額面の非常なる重量に更らに不審の雲は霽れませんでしたが吾家に歸着いて彼の額面を壁間に掛けんと致しましたが額面の重量にや堪えざりけん額面を支ふべき釘はポッキと

折れて額は地上に墜落ちたのでジュリヤンは大事相に額面を起しましたが上より落る途端に墜ちたる故か額面の後部の方が少しばかり缺損じ額面の内部より何やらん一個の卷いた物が現れ出でましたのでジュリヤンは手に取上げ封を解いて中なる物を撿め見れば這は如何に金貨で五十路易（一路易は英の貨幣一磅に當る）厶イましたがジュリヤンは猶能く調らべて見ましたら前に等しき四個の卷物を發見致しましたので都合二百五十路易の貨幣が額面の中から現はれましたのです

ジュリヤンは悦喜に堪えず財寶の周邊に躍り立ち「オヽゴレハ〳〵私は俄かに金満家になつて了ッた」とは云ふものゝ其喜悦に引替へてジュリヤンを窘める一個の思慮胸に浮出でましたジュリヤンは吾れと吾心に打向ひ「コノ貨幣を私の身に附けて宜からうか如何にも私はコノ額面を買取ッたには相違ないが若し先方の賣手がコノ額面の中に此様な財寶が籠ッてるとを知ッて居たらば五法で手放したのではなからう歟否々コノ財寶は私の所有ではないして見れば是りや彼相續人達へ返却して遣らねばならぬのだ」

ジュリヤンは斯く決心しましたが最初額面の中より卷物と一緒に小さき書付の現出でたるを知らざりしが今しも不圖其邊に書付の落ちてあるに氣付きまして拾上げ披らき見るに

「余は余の相續人等が恩知らずにてあらん歟を恐るゝなり彼等にして萬一余の肖像を賣却するが如き卑劣なる所業を爲すに於ては余の肖像は疑ひもなく生前余が恩惠に浴せる者の中の或一人のために購はるべし額面の中に籠れる金額は購賣者の所有たるべし余は額面の購賣者に右の金額を與ふる者也　「チュラック」とぞ書付けありぬ

ジュリヤンの喜悦は譬ふるに物なく今は心安らかに右の貨幣を吾が所有として差支なきにぞジュリヤンは終

に吾が所有となせしがコノ事早くも世間へ知れ渡りしが彼相續人等はジュリヤンに對して遺金取戻の訴訟を起し裁判沙汰となりましたがチュラックの遺書に依りてジュリヤンの勝訴に歸し彼の姪と甥とは訴訟入費を負擔する樣に判決されましたが人皆姪と甥の强慾と恩知らざるとを嘲り笑いました

ジュリヤンは吾が居間に恩人の肖像を掛けましたが之を打眺め既往を追想ずして一日たりとも空に過ごしたるとはありませんでした

## 鹽辛ひ料理（上）

司馬のや

主人　水野　　友人　海田
妻　羽根子　　侍女　みつ
判事　只須
妻　伊奈子

羽根子（美なる常服を着し、大きな前垂を懸く）みつや火が消へるといけぬから最う少し炭をおつき。（右方の椅子に懸け小本を披見して）（新鮮の牛酪半封度及白三盃を適宜に混入し火に上せ充分ドロドロと爲すべし）（以下默讀す）旨ひ〳〵。干葡萄、玉子、檸檬皮……皆揃つて居る。（室内の柱時計をながめ）をやもう一時十五分だのに良人では未だ御歸りはない……然し、料理がまだ出來て終はらないからいゝもの、出來た時分には歸て戴きたいものだ。

水野　どうか、お先に御入りください。
羽根子　良人お歸り遊ばせ……おや海田さんようこそ。
海田　今日はあまり早く出まして失禮致します。
羽根子　こんな形態で御座います。御免あそばせ。
水野　お前何を始めたのだ前垂懸けで。
羽根子　料理を致しました。
水野　（驚ひて）料理？

海田　(疑て)御料理!

羽根子　(すまして)料理です。

水野　(かなしく)夫れは又た何故、どう云ふ譯で。

羽根子　何んですね、そんな聲で。

水野　お前はそんな骨の折れる事をしなくつてもよいのに。

羽根子　仕樣がないでは御座りませんか。下女は四五日前からふくれて居て少しも云ふ事を聞きませんから、今日暇をやつて直ぐに出し、仕方がないから本屋へ使をやつて、料理案内と云ふ本を求めて自分で料理を始めました。

海田　御自分で?

水野　かわりが來るまでは料理屋へ行て喰ふとか、又た品物を取寄せるとかすれば、良いでいないか。

羽根子　はい、夫れは良いで御座いましやうが、何の爲に家一軒持つてゐるのです?

水野　でも場合に依つては是非がないではないか、お前は是れまでまだ料理法を習つた事はあるまい。

羽根子　料理法と云ふても、魔術ではあるまいし、良人大變馬鹿な下女でも、料理は出來ますよ高等教育を受けた婦人が出來ない事があるものですか? 此樣に見へても妾は是迄幾度も咖啡を煮ましたよ。

水野　彼の亞留箇保留を燒く器械で?

羽根子　はい、夫れも料理ですが術なぞと云ふものは毛ほどもありません。細工は流々仕上げを御覽じませ。海田さん、今日はお客になつて妾の手際の處を見て頂戴な。

海田　(驚て)私ですか、有難ふ存じますが今日は只先日御約束の「食鹽專賣權廢止論」と題する冊子を、拜借に出ました許りですから、何れ又。

羽根子　夫れでも丁度時分ですから、何も御座いませんがお交際遊ばせな。

海田　(困りて)でも僕は……

羽根子　何です?

海田　料理店で喰ふことは、慣れておりますが……

羽根子　ですから、家族の中で召上るのも珍敷く、急度ホームの眞味は那邊にあるか、御分りになりますよ。

水野　實に左樣じや、君是非居給へ。

海田　君までお口添か?僕は他に急用がありますから今日は御免蒙むります。

水野　少し遲れてもいゝではないか?

羽根子　(海田の帽子を取り去りて)そんなに云はなくつてもいゝでしやうがチエ、妾は前垂を脱して直ぐに御馳走を出しますから、まアお懸け遊ばせ。(出て行く)

海田　(其帽を取り、逃出さんとす)

水野　(海田の衣を握りて)待ち給へ、何處へ行く?

海田　放して呉れー

水野　君は妻の料理法を恐れて居るのか。

海田　實を吐けば左樣さ、君の奥さんは洋琴を巧みに奏したり、美音で歌つたり、英語でも、佛語でも、流暢に話される事は知て居るが、料理法に通曉せらるゝ事は、今初めて知つたのだ。

水野　君、料理は婦人の天稟ではないか?

海田　是は心理上の御明論だ、其の證言が承知致したい。

水野　妻だと云つて、まさか苣菜を、石鹸で洗いもしまい。

海田　何とも云へないよ!

水野　何卒居て呉給へ。

海田　今日は僕の下宿で、御馳走がある筈だから

な‥‥

水野　まあ—是非共いたまへ。

海田　見給へ、君でさへ奥さんの料理には信用を持て居ぬではないか？

水野　先づそんなものさ。

海田　夫れだのに、君は僕を留めて、不幸の同伴者とし、聊か自ら安慰めんとするのだね。

水野　全く以てそう云ふ次第ではないが、僕は漸く六ヶ月前に結婚した許りさ、總して若き婦人は鋭敏の精神を有する者で、妻も其一人にて萬一自分が期する通りに旨くない時君が居て呉れば、彼が感情に訴ふる度も幾分か減ずるだらうと考へる。

海田　必竟夫婦的雷雨の避雷針とでか？

水野　何とでも云ひ給へ、だが居て呉れ給へ。

海田　僕はいやだ。

水野　朋友と見込んで君に嘆願する。

海田　左樣云はるゝならば居てやらう—が、覺へて居給へ。何れ此返報はするから。僕は餘程君におごつて貰はねば間に合はない。

（侍女は葡萄酒と皿なぞを持運びて卓上に置く）

水野　おい、みつ、お前は奥さんと一所に料理をこしらへたか。

みつ　イ、エ、奥樣は皆御ひとりで遊ばしました。（出て行く）

海田　噫、此望みも水泡か。まだみつの方が知て居るだらうに！

水野　君は毒殺されるとでも思つて居る樣だね。

海田　僕は昨夜夢見が惡かつたから、君の處の御馳走も何たか乙な樣な心地に思ふよ。之を思へば冊

子は明日にでも借りに來ればよかつた。

水野　海田君、

海田　何だよ、

水野　まア留まり給へ。

海田　はい、はい、

---

羽根子　失禮致しました何卒お席へ――(呼鈴を鳴らす)

水野　お前はどうかおしかへ？

羽根子　(輕くすねて)私は貴人に伺度事があります。

水野　何を？

羽根子　貴人今日は何故十五分遲くお歸りになりました。

水野　運河の門橋が舟を通す爲めに開て居つたから待つた爲めさ。

海田　中々嚴重ですね。

羽根子　へい、貴君方の樣な性惡るの御方には、此位志なければなりません。

---

みつ　(肉湯を持運び來りて再び出で行く)

羽根子　(肉湯を一同へ配る)

羽根子　冷却ませぬ中にどうか。(食す)

水野
海田　(肉湯を食し互に見合せて口をツボメル)。

羽根子　如何で御座います美味く御座いませんか？

海田　エ、まだ熱う御座います。

羽根子　熱くはありませんよ―、貴人何故召上りません？

水野　(少し笑つて)お前此肉湯は、鹽辛くはないかへ？

羽根子　(銳く)鹽辛い？何の意味です？

水野　辛ひでは惡いかも知れぬが、鹽が少し入過てはいないか？

羽根子　イ、エ多くもなく少なくもない樣にはいつて居

ります、私には美味しう御座います。(食し咳嗽出づ)

水野　どーした、お前は咳嗽が出るね？

羽根子　へい、私は時々咳嗽が出て困ります(喰す)

水野　お前何だね、涙ぐんで。

羽根子　いゝしやありませんか。チホン、チホン、私の考へでは……チホン、チホン、どーかしてチホン、チホン、咽哽たのでしやう、チホン、チホン、一寸御免遊ばせ。(咳嗽を止めて急ぎ行く)

海田　僕は奥さんは肉一斤に鹽一斤とした考へる。

水野　肉湯は眞に喰へない。

海田　僕を免し給へ、まだ他に行けば喰へる時分だから。

水野　今となりては明らめ給へ。

海田　然し之を喰ふ時は渇してたまるまい。

水野　是れも交際の秘訣だらうよ。(肉湯を皿に注ぐ)

海田　是非がない、(同じく肉湯を注ぐ)只奥さんが恨めしい。

水野　何故？

海田　奥さんは一生懸命になつて喰つたではないか？

水野　夫れとも鹽辛ひと云ふがいやさにか？

海田　實に英雄さね……

水野　叱……そら來た。

羽根子　どうも失禮致しました。私は能く……チホン、チホン、此様な目に遇ゐます……チホン、ホチン、醫師に尋ねたら防ぎ様がありましようが、おや、肉湯は召上りましたか、最う一杯如何です。

水野海田　(早口に)ありがとう澤山、澤山、

羽根子　(呼鈴を鳴らす)

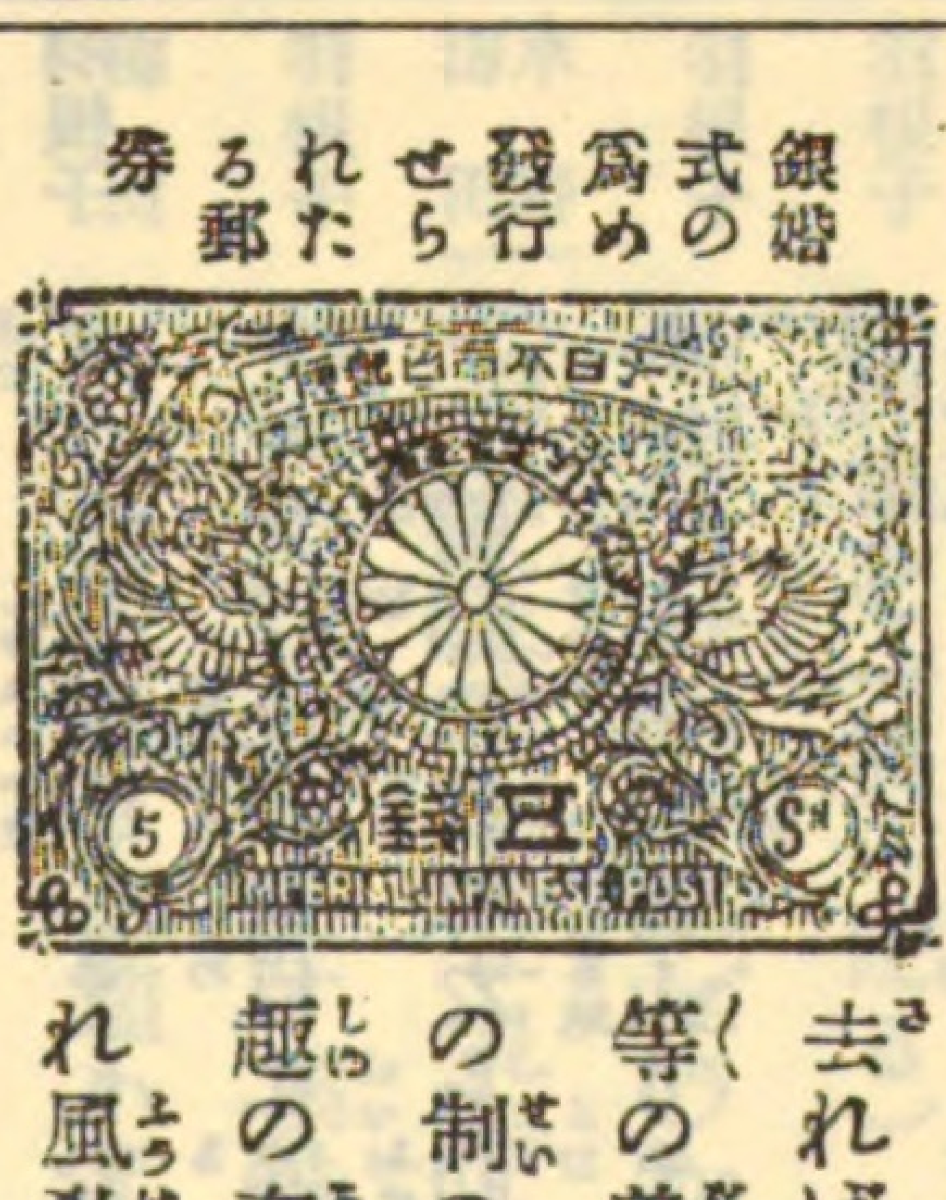
# 時事一斑

## 三月九日

天に光明あり。地に和樂あり。梅花滿城。頌聲滿野。』於戲、三月九日即ち本日の銀婚御式は、我が兩陛下の大典にして皇家の慶事たるは勿論社會の公德を勵まし、國家の地盤たる家庭の風化を保つ上に於て、國民が永く紀念すべき祝節なり。

人倫の道は端を夫婦に發す。夫婦和して父子愛し、父子愛して兄弟睦しく、而して後に一家輯雍一國協和す。故に夫婦を正すは一國を正すの始なり。今我が兩陛下の新に其銀婚式を擧げさせ給ふもの、一は以て兩陛下の天長く地久しく變らせ給はざることを祝し皇家萬世の基を慶すると共に、一は以て其大なる摸範を國民に垂れさせ給ふにあらざらんや。

去れば今回の大典は、亦男女同等の義の宣言を意味し一夫一婦の制の訓示を意味し、家庭の眞趣の在る所の誨告を意味す。是れ風敎の上に於て國民の永く紀念するに足るものにして、最も莊重敬肅に之を祝せざるべからざるものなり。




銀婚式の爲め發行せられたる郵券

今此の大典が如何に盛に擧げらる丶かを見るに、

### 御祭典次第

午前の第八時御殿の御裝飾を奉仕す（大眞賢垣の如し）

次宮内省官員着床

次開扉三前（此間奏樂）

次神饌及御幣物を供す（此間奏樂）

同第九時　御出

先是親王以下勅任官、麝香間祗候、錦鷄間祗候等着床

次賢所御玉串を奉り給ひ　御拜御告文

之を奏し給ふ（御鈴如恒）
次皇宗御玉串を奉り給ひ御拜御告文を奏し給ふ
次神殿　御拜畢て入御
次皇太子殿下　御拜　此時著床の諸員起つ
　御拜の間親王以下著床諸員起つ
　先是式部官御休所より御誘引
次親王以下勅任官麝香間祗候錦鷄間祗候拜禮
次宮内省奏任官判任官拜禮
次御幣物及神饌を撤す（此間奏樂）
次閉扉三前（此間奏樂）　次各退出
同第九時五十分宮内省官員著床　次開扉の前
同第十時　皇太后陛下　御拜御玉串を奉り給ふ　皇后陛下　御拜御玉串を奉り給ふ
　御拜の間著床の諸員起つ
正午十二時より午後第一時迄有爵者從四位以上勳三等以上並に神佛各宗派管長等參拜
同時奏任官准奏任待遇の輩及從八位以上勳八等以上の輩等參拜　同時門跡寺院住職等參拜
第一時より同第二時迄判任官准判任及判任待遇の輩參拜　次閉扉午後三前　次各退出
神宮　神武天皇御陵　官國幣社　幣帛神饌料
御奉納

○

午前第十時禮砲執行
天皇皇后兩陛下は鳳凰間に於て左の諸員の拜賀を受けさせらる

午前第十一時
親王同妃、親任官、公爵、勳一等宮内勅任官、各國一等官、總代一名宛各師團長、各鎭守府司令長官、常備艦隊司令長官、各府縣知事、侯爵總代一名、各國二等官總代一名宛、麝香間祗候總代一名、錦鷄間祗候總代一名、伯子男爵各總代一名宛　以上夫人一同
同第十一時四十分　各國公使及公使館員同夫人　正午十二時より午後第一時迄左の諸員參賀　非役有位の輩　非役勳二等以下の輩　奏任官奏任准奏任待遇の輩　神佛各宗派管長の輩　門跡寺院住職の輩

○

判任官准判任判任待遇の輩適宜の時刻各廳へ參賀

○

青山練兵場觀兵式（當日雨天なれば止む）
午後第一時三十分御出門　鹵簿第一公式
皇帝皇后兩陛下御同車　次式場著御　次閲兵式　次分列式　右畢て還幸

○

午後第六時三十分左の諸員を召し豐明殿其他に於て宴會を催さる
親王、同妃親任官、公爵、勳一等、一等官、侯爵二等官、麝香間祗候、錦鷄間祗候、伯子男爵以上夫人一同　典侍、掌侍、其他女官各國公使夫人

○

午後第九時三十分左の諸員を召し正殿に於て舞樂御覽
親王、同妃、親任官、公爵、勳一等、一等官、侯爵、二等官、麝香間祗候、錦鷄間祗候、伯子男爵從四位以上、勅任官取扱雇外國人、勳三等以上内外國人　以上夫人一同
文武奏任官五等以上　各國公使及公使館員同夫人　在東京橫濱各國

海軍將官同夫人　横濱碇泊の各國軍艦々長

○

舞樂曲目　萬歳樂　延喜樂　太平樂　陪臚

亦莊重と謂ふべき哉。

而して其盛意を擴むる爲に、此日宮中に召されざる文武官吏議員市町村長神佛各管長有位者帶勳者等に酒饌料を賜ひ、又高齢者八十歳以上九十歳以上百歳以上は、金員を賜ふ。

盛典已に此くの如し、臣民の之を奉祝するもの、各赤心を表せる物品を獻して、聖旨に副はんとせざるはなし。

東宮殿下は、島臺形紫檀の臺に銀製の岩高さ二尺上に銀鶴二羽立てると同様の二銀龜岩上に在る圖の一對を上れり。

皇族内閣各省其他の文武官吏を始め、府縣廳市町村會社各會個人に至る、各思い〳〵品物を獻ぜり。

日本婦人矯風會の如きも、銀モールの梅模樣へ縁り際に網くさりあり、中に馥郁たる芳香の嚢を入れ

萬代の春をかざしと咲く花に
なくうぐひすの聲ぞのどけき。

鶯の萬代うたふこえすなり、
千代田の宮の花の梢に。



（日本婦人矯風會獻品）

の歌を縫ひたる數葉の手巾を獻ぜり。

萬戸千門、旭旗翻り、歡聲湧き、未曾有の盛况を以て之を祝せざるはあらず。

然れども若し此日を以て、醉飽佚樂の特許日の如くに思惟し、途に泥醉の客あり、堂に絃

歌に狂するの人ある如き、醜状を顯するに至ては、是れ大典を祝するにあらず、大典を汚すなりとて、之を憂ひたりし日本婦人矯風會は、豫め書を東京府知事各區長等に贈て其注意を促す所ありき。眞成に祝意を表するものゝ、尤も然るべき所たり。

謹啓今度　兩陛下大婚廿五年御祝典被仰出され候事吾々に於ても歡天喜地千萬難有き次第唯有らん限りの心を盡し誠を盡し奉祝するの他無之候抑々今回の御大典は唯　兩陛下の御清福量りなきをことほき遊され候のみならず併し人倫の大道を吾々臣民に御示し被遊候　大御心と恐察し奉り愈以て難有く奉存候就ては吾々も其覺悟にて奉祝參らせねはならぬ儀と奉存候誠に神聖なる大典を奉祝するの道は亦清潔なる方法によらさる可らす候義は今更申すまでもなき事に御座候若し萬々一にも飲酒に犯し猥りかましき振舞をなし或は人倫の道に悖れる賤女子抔を引出して祝意を表せしめんとするか如きことあらは大典をけかす所以にして恐なから　兩陛下の大御心に反き奉るのみならす併て日本臣民の品格を墮落せしめ且は墮落したる手本を世界に吹聽する理由にも相成り寔に不相濟儀と奉存候間何卒貴下に於ても充分御注意御取締被下度吳々も懇禱致し候吾々平生社會矯風の目的を以て相集り候もの今日に於て默止する能はす謹んて鄙見開陳仕り候何卒吾々の誠心御洞察の上御嘉納被成下候はゝ獨り吾々の本懐のみならす亦た社會風の進歩さも可相成而して前古無比の大典を奉祝する本意にも相叶ひ可申奉存候頓首

## 尋常中學校科程改正

尋常中學校は高等なる普通教育を施す所にして、曰く實業に就くの準備曰く、高等學を修むる階梯の二目的を以て打建てられつゝあるもの。而して現今の弊は、曰く敎科の複雜に過ぐる事、曰く高等學を修むるの階梯たるに偏して、實業に就くの準備に乏しき事、曰く國語に重きを置くの足らざる事の、三事あるを以て、之を矯めて、第一に最要ならざる學科を除き若くは隨意科としたり、第二直に實業に就くものと更に高等學を修むるものとは自から其修養する所を異にするとにて、之を分岐して第四年級以上は直に實業に就くものゝ爲に別に實業科を置けり、第三に大に國語を重んぜり。

之を今回改正の尋常中學校科程とす。改正し得て稍眞制に近づきたるものと謂ふべし。

## 小學校教科書審査

教育界の積弊は已に膏肓に入れり。梧陰大臣毅氏汲々之を治して未だ遽に之を濟治すべからさるものは、豈其英斷なる根本的手術に於て猶未だ至らざらん所のものあるか。教科書採否の審査に幾多の醜評各府縣にて聞かれき。

嘗て、地方官の會合あり。大浦島根縣知事文部大臣に告ぐ、『小學校教科書の審査につき某子爵又は某伯爵より依頼の書翰頻りなり。願くは相當の取締ありたし』と。

依頼の書翰猶可なり。其甚しきは黄白の翅なくして飛ぶあり。

## 教員免許規則

尋常師範學校尋常中學校高等女學校教員免許法規定せられ、小學校教員撿定に關する規則修正せらるゝ所ありたり。亦細心的の改良。

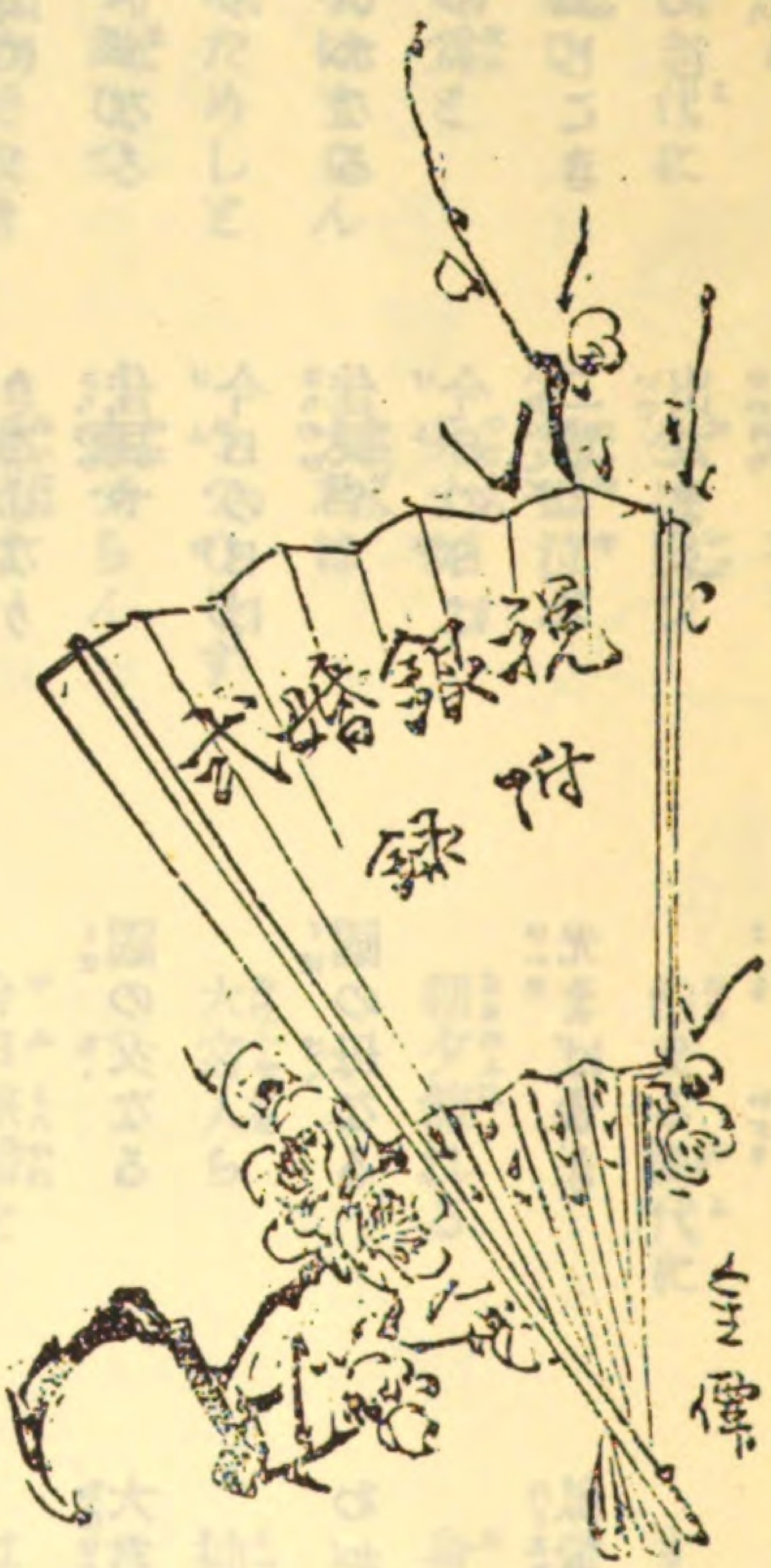
## 勞働者の保護

商工業の發達に伴ひ、勞働者を保護するの必要は、漸く生じ來るべき事なるが、今や漸く職工條例及び傭主被傭人條例の制定を見るに至らんとせり。即ち頃者政府が東京府下の職工組合に「傭者被傭者間の從來及び現今の使役上に於ける習慣關係情義」を諮問し、八十餘組合の總代二百五十餘人組合人七百餘人が二月二十五日厚生館に會議したる如き、其一例なり。

## グラッドストン

老の力は今や老英雄グラッドストンをも社會舞臺の正面より押落せり。三月三日倫敦發電報云ふ、『今日ウィンソル宮に開かれたる内閣會議の席上に於て、グラッドストン氏は愈内閣の領首の任及び財務長官並に樞密尚書の官を辭し、辭職の理由を說明せり。女皇陛下は同氏の辭職を裁可ありて、外務大臣ロスベリー卿を召されたり』と。

# 天長地久




## 銀婚式

家永ゆい子

一、かゞやき渡る　九重の　大内山に　照る日影
今日はことなる　ひかりかな

二、重なる雲の　上人等　朝庭にならぶ　百官が
袖にもあまる　うれしさや

三、わが大君の　二尊
　千代をこめたる　み契りを
　結び玉ひし　初より

四、廿年あまり　五年を
　皇國の父母と　仰がれて
　偕にめでたく　志ろしめす

五、皇帝が恩惠は　日のひかり
　皇后が仁愛は　雨露と
　蒼生を　やしなひぬ

六、時しる春は　さゝらぎの
　空打かすみ　諸鳥の
　聲も長閑に　きこゆなり

七、今日はいかなる　佳辰や
　國の父なる　大君の
　大婚式の　今日の日は

八、今日はいかなる　佳辰や
　國の母なる　わが君の
　大婚式の　今日の日は

九、いともかしこき　二尊
　光まばゆき　鳳輦に
　御坐偕にし　出たまふ

十、御旗の色も　光添ひ
　四方の飾も　いやたえに
　列る鹵簿　かゝやけり

十一、鳳輦仰く　萬民ら　今日しもわけて　美はしき
君が龍顔　伏し拜む

十二、明らけき代に　生ひ出つ　治まる御代に　すむ民ら
御恩慕ひ　只感泣ぶ

十三、皇國の爲と　兵士が　朝夕鍊れる　身も魂も
みそなはすらん　大君は

十四、代々のためしと　うつひさす　大宮人ら　袖かざし
歌ひつ舞ひつ　奏づらん

十五、いともめでたき　婚式は　今日銀婚を　はじめにて
尚幾重ね　あれよかし

十六、やがて黃金の　婚式も　金剛石の　ことほぎも
めでたく君や　迎ふらん

十七、照る日まばゆき　大內裏は　雲の上人　もろたみゆ
獻げし品ぞ　山なせる

十八、岩ほと堅く　うごきなき　君が御代こそ　龜の尾の
ながくもさかえ　ゆけよとて

十九、花にきてなく　鶯も　萬代こめて　いと深き
契りを祝ふ　聲すなり
二十、囀る小鳥　蛙さへ　のどけき今日を　知顔に
うたひすさばぬ　ものぞなき
廿一、靜けき御代を　慕ひつゝ　海の外より　こし人も
ともに祝ぐ　婚式や
廿二、子らは思ひも　掛けざりき　小指屈ふ　まつゝ日の
上にもかゝる　日ありとは
廿三、老は思ひも　掛けざりき　頭に積る　雪白と
ともに頂く　たまものを
廿四、都の人は　いはでしも　いぶせき賤か　樵夫も
君が代謳ふ　聲ひゝく
廿五、めくみにもれぬ　たみくさら　千島のはても　沖繩も
君が代謳ふ　聲ひゝく



# 女の子男の子

湖處子

冬がれ山の山蔭の、
樹の下社見わたせば。
年は七つか八つならん、
女の子男の子の友どちが。
いつも妹背とよびかはし、
まゝごとしては遊びけり。



ひまなく歌ふ妹はしも、
こゝろ長閑き鳥のよ。
歌ひて米をときにけり、
歌ひてまゝをたきにけり。
うたふか中に背か好む、
すし出來たれはたうべつゝ。
せはしばかりにゆき玉へ、
わなみはきもの洗はむと。
一人か谷に下りたては、
一人は山へとのぼりつゝ。
わかれ〳〵になりなから、
たえす問ひけり答へけり。
いもせの中にて上もなき、
中むつましきいもせぞと。

妹は背か云ふまゝなれは、
背はまた妹にしたかひつ。
二人のこゝろ事ことに、
あひて一人のことくなり。
ある日まゝ事はてぬれは、
いつもの如く谷川に。
下りて手あらふ折からに、
圖らすめの子溺れけり。
溺るゝめの子救はむと、
男の子もともに溺れけり。
おほれ〳〵て妹とせは、
抱きあひなから流れけり。
抱きあひなから流れつゝ、
淺瀬にたゝよひ着けれは。

ともかくもしてすくひあげ、
めの子を家へと送りけり。

あくるあしたに來て見れば、
あはれ二人の友どちは。
また心なき子なれども、
まことの妹背と見ゆるまで。
妹背の中もむつましく、
まゝとしては遊ぶなり。



# 歐洲諸國王家の片影（一）



## 一、伊太利

昨年春四月の暮、空青く風芳しき歐南伊太利に於ては、國王ウラベルト一世と皇后マアガリタ陛下の御婚二十五年を祝して盛なる銀婚式を擧げられたり。

讀者のよく知らるゝ如く、伊太利は歐洲諸國の中尤も古き歴史を有するも、今の伊太利王國のサヴオイ朝の下に一統せられたるは、略我邦の維新と頃を同ふし、即ち今王ウラベルト一世の如きも父王ヴイクトル、エムマニユエルに從て兵馬の間に創業の苦辛を嘗められたるなり。斯る新國の事なれば、内政外交の困難は一ト方ならず、從て上に立たるゝ國王皇后の責任やいとも大なり。

マアガリタ后は先王ヴイクトルエムマニユエルの弟ゼノア公の息女にして、即ち今王と從兄弟の間柄なり。其昔今王の二十四歳に達せらるゝや、父王一日宰相を呼び寄せ、早速ウラベ

ルトの爲に然る可き配偶を求む可き旨勅諚あり。首相は其御配偶は已に小臣の胸中に御坐候とて、即ちマァガリタ内親王の事を申せしに、エムマニユエルは欣然テーブルをハタと打ちて「妙、卿が言の如くんば成程我姪はサヴォイの家の女たるに恥ぢず、イザ朕自から往きて卿が言を確めん」と。斯くてウムベルト二十四、マァガリタ十八歳に當り玉へる千八百六十八年を以て即ち結婚の式を擧げられたり。當時伊太利は兵馬の塵未だ收まらず、或は殆ど砲響劍影の中に擧げられしが、廿五年の年月何時か過ぎて、王后春秋漸く長け玉へば、人心次第にサヴォイの家に服して、國の基もやゝ定まらんとするに到れり。「恐懼とサヴォイの家とは未だ曾て出會せず」とはサヴォイ家の標語なるが、今王の如きも亦職分を知つて恐るゝ事を知らざる寧ろ朴訥剛毅の君王なり。テーブル市に激烈なる虎列刺の流行するや王は左る歡樂の場所に赴き玉ふの約ありしを「朕はテープルに行かん」とて直ちに虎列刺の巣窟に入り、尤も汚穢なる裏屋、尤も激烈なる重症まで殘りなく見廻はり玉へるは、何人も知る所、伊太利人が今日に到る迄流涕して語る所なり。父王エムマニユエルの莫大の負債を殘して崩御あるや、議會は國庫より之を拂はんと決議せし



(伊太利王)



(伊太利皇后)

も、今王は父の負債は吾負債也とて宮中の費用を節して悉く之を償却し、煙草は賊をなすと聞ひては「朕は國王の躰面にかけて誓つて必らず禁煙せん」とて爾來一切禁煙せられし如き、事は小なるも以て其人を知る可し。國王元來武骨の質、天幕を張て山野に住し、麁衣麁食風雨暑寒の嫌なく、岩角樹間に羚羊を逐ふは其尤も樂とせらるゝ所。而して皇后の如きも、好んでアルプスの高きに攀ぢ上らるゝなり。

「マアガリタ」の字は伊太利語にて「雛菊」を意味す。皇后は實に雛菊の如く美人の譽歐洲に高く今や已に四十を過ぎてやゝ肥滿せられたるも、曩時の姿猶存せり。國王の率直武骨なるに引易へて、皇后は風流文雅の嗜み深く、音樂書籍の如き其尤も愛好せらるゝ所、其晩茶の會には文學者學者多く群集す。伊太利現今第一流の詩人カアルダツシーの如きは、もと激烈の共和論者にて大に王室を嫌へる男なりしも、何時しか皇后に懷けられて温順の羊となり、皇后を讃美する短歌を作つて友人を驚かせり。皇后亦常識に富み玉ふの名あり、國王もしば〳〵其判斷に依賴せらる。唯一の缺點は、衣服裝飾の華奢に過ぐる事也。例せば其の眞珠を愛せらるゝ如き殆んど法外なるものありて、頸邊に纒はるゝ眞珠の鎖は連また連をなし、而して王は年々一連の眞珠を贈らるれば、今は眞珠の鎖は遙か腰を過ぎ、裝飾過ぎて却て奇怪に思はるゝ程なりと云ふ。

ウムベルト王當年五十歳、年よりも早く老いて頭髮夙に雪の如くなり玉へり。皇后は深く之

を氣にし、髪を墨く染め玉へとしば〳〵歎願あるも、率直なる國王は聞き入れ玉はず。於是皇后一策を案じ、巴里より極上の染髪粉を取り寄せ、用法の書き付に添へて竊かに王の衣裳室の鏡の前に置き、ソシラヌ顔にて居られたり。其頃、皇后の深く寵愛ある純白雪の如き毛並の犬ありけり。數日の後、皇后は侍女を相手に針仕事して坐しけるに、何ぞ圖らん例の白犬何時の間にか墨の如く黑光りに光りつゝ走り來らむとは。ウムベルト王は染髪粉を犬の白髮に塗られしなり。是れより染髪の一條沙汰止みとなりぬ。

亦或時王は皇后に基督降誕節の進物をなさむと、皇后の侍臣を呼びて相談ありけるに、此男諂はぬ男にて、皇后は裁縫屋に大分の御負債ある由を申し出でぬ。國王打頷き、其負債を竊かに拂ひて、受取書を基督降誕祭の朝皇后の食卓のナプキンの下に隱し置かれたり。皇后食卓につき玉ふに及び、ナプキンを取り上げ玉へば、下には裁縫屋の受取山の如く積むで、外に一物なし。是れより皇后は衣裳の好みに大に節制を加へらるゝことゝなりぬ。

武骨の國王音樂の趣味なく、時に歌はるれば惡聲鑼の如く忠義に凝つたる臣下と雖も常に耳を掩ふ。近年皇后書を讀むに眼鏡をかけらるゝことゝなりしに、王は之を好まず。皇后例の如く眼鏡をかけて書を取り上げらるゝ毎に、王は「マァガリタ、眼鏡を外づし玉へ」と言はる。皇后猶も聞き入れなき時は、王は「マァガリタ、卿若し眼鏡を外づさゞれば、朕は一ト節歌ふて聞かす可きぞ」と云はるれば、皇后は早々に眼鏡を外づさるゝなり。盖し王の歌を謹むで聞くは

亦一種の刑罰也。此れ太子チーブル親王の曾て人に語られし笑話なり。

チーブル親王は當年二十五歳、よく母后の面影を傳へらる。其少時の些細なる逸事、以て其人物の一端を知る可きものあり。親王七歳の頃、一夕伯林駐剳伊太利公使ラウチー伯宮中に來謁しければ、母君は御身も行きて伯と物語りせよと仰あり。親王は直ちに進みて伯と握手ありしも、伯が佛語にて伊太利語にてさま〴〵の話をなしかけたるに拘はらず、親王は唯微笑點頭するのみにて更に一語も發せられざれば、母君は叱つて室外に送りやり玉へり。其夜深けて母君例の如く親王を見に來られしに、七歳の皇子は鳴咽して母君の頸に縋つき「母上、怒り玉ふな、ラウチー伯にも宜しく斷はり玉はれ、小子は少しも無禮致す積りはなかりしも、今日は日曜にて、日曜には英語の外は用ふ可からずと母上の堅く仰せられしに、伯は佛語伊太利語ばかり用ひ候ゆへ」と涙ながらに辯解されぬ。亦或時皇后は幼皇子の少しも金錢を使はず貯蓄せらるゝを見玉ひて、此は定めて兼ねて彼れが好む價高き玩具を買はむ爲めなる可しと思ひ居玉ひし程に、或日幼皇子ツット來りて絹衣裳の價は如何程致すものに候ふやらんと問ひ玉ふ。大抵斯々なりと皇后答へ玉へば、チーブル親王は携へ玉へる金匣を母君の膝に打明け「此にては少し不足致す可し、然し小子自から獨りにて店に行きて成丈廉く衣裳を買ひ求め候はん、是非共保姆に一ト重買ひて遣はし度候へば」と。

今を距る十六年前、國王即位の日、勅語の末句に左の一句ありき「朕が唯一の慾望は、我民の愛

に背かざらん事也」と。其日王は人民歡呼の聲に感動せられ、猶幼なき太子をかき抱て「見よ、父が百歳の後御身が即位の時も斯く歡び迎へらるゝ樣、父は心して國に當る可し」と言ひ玉へり。而して過ぎし十六年の經歷を顧みれば、ウムベルト王は實に其誓に背かれざりしなり。

## 二、露西亞

事實は小說よりも奇なり、とは眞なる哉。露西亞皇后の事の如きは、誠に一篇の小說なり。今は三十年の昔となりぬ、北海の風寒き丁抹の都コーペンヘーゲンの或家の四階に、父母二兄弟、三姉妹、いと寠々しく暮せる家族ありけり、三人の姉妹は唯一の寢間を有し、衣裝藏むる簞笥もなければ、壁に釘うちて衣類を掛け、帷を垂れて之を隱し、薄き木綿切れにて被へるテーブルは課業の文臺ともなり仕事の臺ともなり遊びのテーブルともなり、勿論絹衣裝着たることもなく、第二女なるダグマァは曾て夜會に行くにハンケチの持合せなく朋輩の某伯爵夫人に向ひレースの緣とりたるハンケチを暫時貸して賜はれと涙を含みて歎願せる程なりし。此憐れなる家族の主人夫婦こそ今は丁抹國王皇后たる昔しのクリスチアン親王夫妻、其一子は今や希臘の王たるヂオルヂ一世、長女は英國皇太子の妃ウエールス內親王、季なるは英の皇族カムボルランド公爵夫人、而して涙ながらにハンケチの無心を言へる少女こそ世界第二の大帝國の國母と仰がれ玉ふ露西亞皇后陛下也。

露國皇后は其初めダグマァ皇女と呼ばれ玉ひて、今帝の兄君なる故ニコラス太子に嫁せら

亦一種の刑罰也。此れ太子チーブル親王の曾て人に語られし笑話なり。

チーブル親王は當年二十五歳、よく母后の面影を傳へらる。其少時の些細なる逸事、以て其人物の一端を知る可きものあり。親王七歳の頃、一夕伯林駐劄伊太利公使ラウチー伯宮中に來謁しければ、母君は御身も行きて伯と物語りせよと仰あり。親王は直ちに進みて伯と握手ありしも、伯が佛語にて伊太利語にてさま〲の話をなしかけたるに拘はらず、親王は唯微笑點頭するのみにて更に一語も發せられざれば、母君は叱つて室外に送りやり玉へり。其夜深けて母君例の如く親王を見に來られしに、七歳の皇子は嗚咽して母君の頸に縋つき「母上、怒り玉ふな、ラウチー伯にも宜しく斷はり玉はれ、小子は少しも無禮致す積りはなかりしも、今日は日曜にて、日曜には英語の外は用ふ可からずと母上の堅く仰せられしに、伯は佛語伊太利語ばかり用ひ候ゆへ」と涙ながらに辯解されぬ。亦或時皇后は幼皇子の少しも金錢を使はず貯蓄せらるゝを見玉ひて、此は定めて兼ねて彼れが好む價高き玩具を買はむ爲めなる可しと思ひ居玉ひし程に、或日幼皇子ツト來りて絹衣裳の價は如何程致すものに候ふやらんと問ひ玉ふ。大抵斯々なりと皇后答へ玉へば、チーブル親王は携へ玉へる金匣を母君の膝に打明け「此にては少し不足致す可し、然し小子自から獨りにて店に行きて成丈廉く衣裳を買ひ求め候はん、是非共保姆に一ト重買ひて遣はし度候へば」と。

今を距る十六年前、國王即位の日、勅語の末句に左の一句ありき「朕が唯一の慾望は、我民の愛

に背かざらん事也」と。其日王は人民歡呼の聲に感動せられ、猶幼なき太子をかき抱て「見よ、父が百歲の後御身が即位の時も斯く歡び迎へらるゝ樣、父は心して國に當る可し」と言ひ玉へり。而して過ぎし十六年の經歷を顧みれば、ウムベルト王は實に其誓に背かれざりしなり。

## 二、露西亞

事實は小說よりも奇なり、とは眞なる哉。露西亞皇后の事の如きは、誠に一篇の小說なり。

今は三十年の昔となりぬ、北海の風寒き丁抹の都コーペンヘーゲンの或家の四階に、父母二兄弟、三姉妹、いと窶々しく暮せる家族ありけり、三人の姉妹は唯一の寢間を有し、衣裝藏むる箪笥もなければ、壁に釘うちて衣類を掛け、帷を垂れて之を隱し、薄き木綿切れにて被へるテーブルは課業の文臺ともなり仕事の臺ともなり遊びのテーブルともなり、勿論絹衣裳着たることもなく、第二女なるダグマアは曾て夜會に行くにハンケチの持合せなく朋輩の某伯爵夫人に向ひレースの緣とりたるハンケチを暫時貸して賜はれと涙を含みて歎願せる程なりし。此憐れなる家族の主人夫婦こそ今は丁抹國王皇后たる昔しのクリスチアン親王夫妻、其一子は今や希臘の王たるヂオルヂ一世、長女は英國皇太子の妃ウェールス內親王、季なるは英の皇族カムボルランド公爵夫人、而して涙ながらにハンケチの無心を言へる少女こそ世界第二の大帝國の國母と仰がれ玉ふ露西亞皇后陛下也。

露國皇后は其初めダグマア皇女と呼ばれ玉ひて、今帝の兄君なる故ニコラス太子に嫁せら

る可き約ありき。ニコラス太子は今帝の粗朴なるに引易へ、俊秀優美の美少年、ダグマア皇女は全心を擧げて太子を愛せられたり。然るに結婚の式未だ擧られざるに、ニコラス太子はニースに於て落馬して重傷を受け、二十餘春空く一場の夢と消へぬ。終に臨み、太子は父帝母后の面前に於て泣き入るダグマア皇女の手を執て傍らに低頭して立たれたる今帝の手に合はせ、苦しき息をつき「吾弟に嫁し玉へ、吾弟は水晶の如く眞實なる男なり、是れ吾最後の望みなり」と言ひつゝ、其まゝ息は絶へられたり。

偖亦今帝は帝位に上る日ある*



(露國皇帝)



(露國皇后)

※可しとは思ひも寄らず、儲貳ならぬ身は妻定めも自由なりとて、母后の女官波蘭貴族詩人の女と互に將來を約し居られぬ。左れは亡き太子の遺言によりて、新太子ダグマア皇女と結婚ある可き事に定まりし時は、ダグマア皇女は固より今帝も亦一ト方ならぬ苦心にて、ダグマア皇女の如きは或時亡き太子の畫像を見て昏倒せられし程なりき。然るにニコラス太子薨去より十八ケ月を經て、共に褒みて見玉へば、互の誠實なる心底も知れ、失望の情人は茲に幸福なる夫妻とはなられたり。此は實に二十幾年の昔、而して露帝露后は今日も猶新婚の時の

如く睦しく暮さるゝなり。

露廷の觀を見ざる者には、以て壯麗を語る可からず。露國宮城の重なるものは、聖彼得堡の冬宮、アニッチコフ宮、ガチナ宮、莫斯科のクレムリン宮にて、其建築の宏壯廣濶なる、冬宮若くはクレムリン宮にては、此階の一室より同階の他の端の一室に行くに、二十分を要することあり。其内部の粧飾に到ては、莊麗燦爛言語に絶し、若し夫れ夜會など云ふ場合には、見上ぐる計りの海の如き大廣間、燃へ出づるばかりの帷幕を高く絞りて、燦然たる光りの其中に、猩々緋天鵞絨の長裾を曳き同じ色の冠を被肩には水色のリボンに金剛石にて皇后の御名の頭文字をつけたる徽章を帶びし女官二百人餘、銀の縫ある白緞子のペチコートに金の縫ある天鵞絨の曳裾長く曳き寶石を鏤ばめし冠着て白のレースの覆面巾を雲の如くゆりかけ見るも眩ばゆき衣裳を晃めかしたる花の如き貴婦人、文武百官各國全權公使外國貴顯、花の如く星の如く錯綜簇立せる其正面に、皇帝は黒みかゝりし緑色の陸軍將官の軍服に白色の帶を締め白きアストラシヤンの高き兜帽を戴き、聖ウラヂミル聖ヂオルヂ白鷲聖アレキサンドル・ニウスキー各種の勳章綬章を隙間もなく胸にかけ、猶若く見へ玉ふ皇后と相並んで立たるゝ、壯觀、他の歐洲列國の朝廷の遙かに及ばざる所なり。頻々の夜會迎接だに斯くなれば、國の大祝日即位式などの觀は到底筆紙に及ぶ可くもあらず。即位の日皇后の身につけ玉ひし寶石の價は三千萬法に上り、肉菓子朝廷の紋つけたる杯の鑑を賜はりし者五十萬人に上れ

りと云ふ。左れば宮廷の費用冗費も夥しく、例へば曾てニコラス帝の時皇后感冒に惱み玉ひしことありて感冒を治すには脂肪製蠟燭を鼻に付するが好しとし皇后其蠟燭を求め玉ひしに、生憎一挺もなかりければ、其後は屹度四十封度づゝの脂肪蠟燭を備ふることとなりて、今やニコラス后はとくに土となり露宮に感冒の者もなきに、用ふる所なき脂肪蠟燭は不相變年々宮廷費に上れり。今帝は極めて節儉を好まれ、折々竊かに出でゝ物の値段を聞き質さるゝ事あり、宮廷の費用も三分の一を減ぜられぬ。當時露國內廷の人員は男子六百八十名、婦人二百〇九名なりと云ふ。

或波蘭人曾て云へることあり「露帝の敵たる者、若し皇后を識らば、必らず皇后を泣かせ參らするの勇氣なけむ」と。皇后は尤もよく人の心を懷づけらるゝなり。しばしば學校に行啓あり、慈善事業を保護奬勵し、訴ふる所あれば必らず聽きて、帝を慰め、幼皇子皇女の教育を監督し、帝と皇族の間に立て調和に一ト方ならず骨を折り玉ふ。露國誠に不平の徒多しと雖ども、一人の敢て皇后を誹る者なきは、蓋し故あるなり。

露帝性質正直剛訥、氣短意頑腦髓狹隘の評はあるも、其私德更に間然する所なき好紳士なり。現に露京にては戯れに「露西亞帝國廣しといへど、其妻に信實なる者は、皇帝一人のみ」と言ふ程なり。露帝は實に眞面目の人、其心實に天の使命を果し帝王の職を盡さんとするにあれども、不幸にして帝と人民の間には萬里の長城の如き隔てありて、下情上に達せず、而して帝は

其狹隘ある識見を以て其頑固の意地を以て是と認めたる所は是非共成さむとせらるゝを以て、往々にして其目的に反するの結果を獲らるゝことあるなり。亦帝の短氣なるは人よく之を知る。曾て皇子に癲癇の徴ありし時、皇帝は國中の名醫を集めて疾を問はれしに、中なる一人此は定めて癲癇に候はむと申せしかば、帝は苟くも露西亞大帝國の帝王の子供に左る疾のある可きやと烈火の如く怒り玉ひて、其醫師を半死半生に毆打せられし事あり。また曾て虛無黨騷ぎの尤も盛なりし頃、或日侍從某宿直の徒然に卷莨を薰らし居けるに、偶皇帝其室に入り來られ、誰彼時の薄明りに煙りと火の光りを見て、忽ち是は虛無黨の陰謀ならむと走りかゝつて其侍從をとつて捩伏せ、續けざまに鐵拳を加へられしかば、侍從は大聲に助けを呼び、漸く事明了となりて帝は手を放たれたり。是れより世間にては帝は侍從を打殺し玉へりと評判しければ、帝は大勢の人の前にて彼侍從を呼びかけ「〇〇、朕が卿を殺せし以來、機嫌は如何に?」と打笑はれたり。

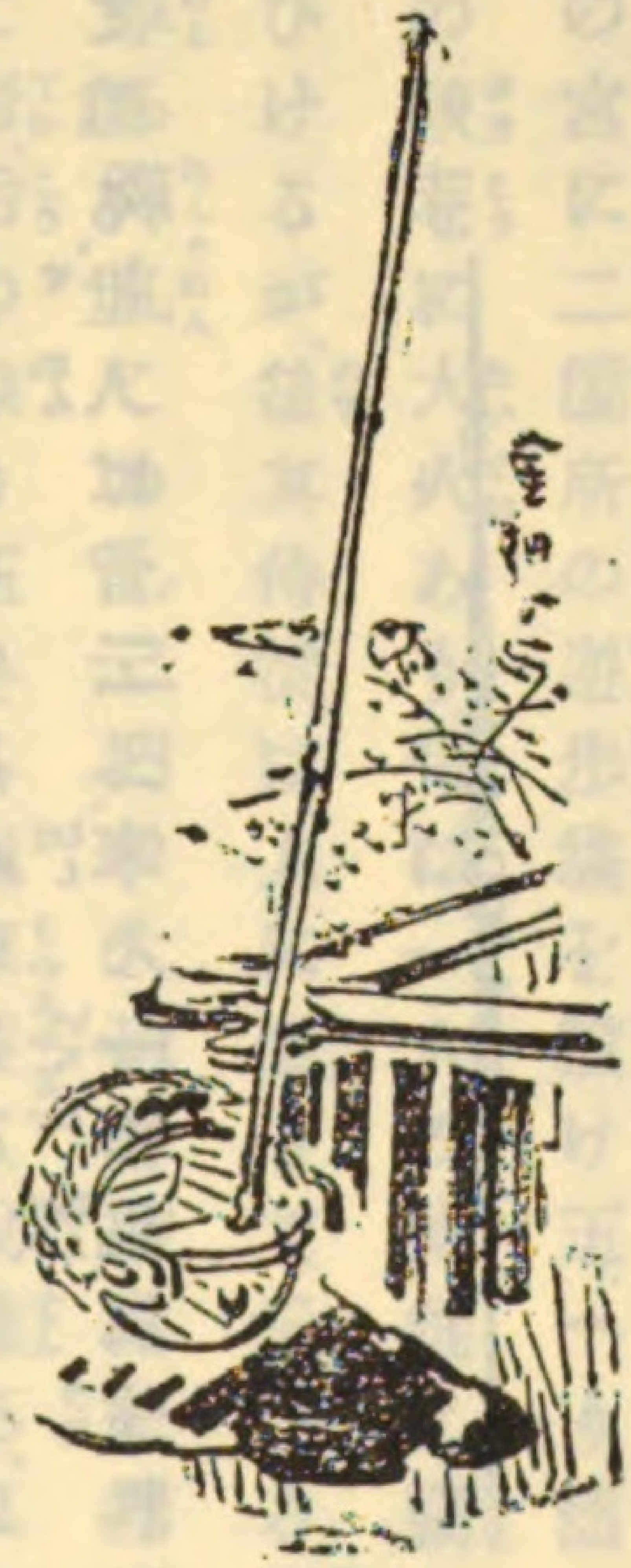
露帝の誠直眞實なる人物を以てして、露國小民の猶皇室を父母の如く敬愛するに拘はらず、上下隔絕君主獨裁の結果として、帝は虛無黨の攻擊の的となり、虛無黨は帝の嗔恚の的となるは誠に是非もなき次第なり。宮城內外の番兵の嚴なるは言ふも更なり、帝后公然外に出で給ふ時の護衛は更なり、一寸散歩し玉ふにもさま〴〵の扮裝せる探偵は見へ隱れに帝を護し、往々にして一探偵が誤つて他の探偵を疑て捕ふることあり。皇后は帝の獨歩散策し玉ふ

を危ぶみ、殊にガチナの宮に二箇所の遊歩場を設け玉へり。然も帝は往々護衛なしに出で玉ふことあり。先年市中の狭巷に大火あり、帝は一人の侍従と竊かに山なす群集の間に立まぢりて火事を見物し玉ひけるが、後其侍従は人に語りて云へる樣「余は陛下の御伴して再び斯る場所に行かむより、寧ろ彈丸こめし二門の大砲を前後に据へたる巷路を獨り歩まむ」と。また先年ボルキーに於て帝、后の乘り玉へる滊車誤て脱線し、二十一名死し、三十六名負傷し皇后も腕に重手を負ひ玉ひし時、皇后は侍者が長く忘るゝ能はざりし悲愴の聲にて「オヽ我六人(帝と五人の皇子皇女)を」と叫び、幼なき皇女は是れぞ虛無黨なる可しと思ひ玉ひしにや「吾を殺すな、吾を殺すな」と叫びて去る將校の外套の下に隠れ玉ひしと云へり。九重門深く鎖すも、短劍、爆烈彈往々にして宮中に忍び入り、皇族の中にすら侍臣にすら心置かれ、風の音にも夢しば〳〵驚き玉ふ皇帝皇后皇子皇女の御上、亦悲む可き事共なり。傳ふ、皇后は此二三年來日々の憂惧心痛の爲めに著しく老ひ玉へりと。焉ぞ知らむ、露西亞大帝國の寶位も皇后にとりては寧ろ針を植へたる坐の如く、夜々の夢は三十年前心置きなき姉妹三人貧しくも亦愉快なる日を送り玉ひしコーペンヘーゲンの四階の室に飛ばざるを。金冠の重味もまた時に太甚しきものあるなり。

露帝露后の尤も愉快に日を送らるゝは、虛無黨の心配も儀式の面倒も後に殘して、コーペンヘーゲンなる丁抹王の家に夏の日を暮さるゝ時なり。世間に出でゝは皇帝よ皇后よ皇太子

よ、何爵夫人よと六箇敷尊まるゝ方々も、此處に來りては婿舅甥叔父、親子、兄弟姉妹、從兄弟同士たるの外なく、隨意に團欒の話を樂み、露西亞皇后は姉君なる英國皇太子妃と共に昔しの少女に返りて、互ひに貯へたる寶石裝飾の類を母上なる丁抹皇后の前に持出して誇り合い、露帝は幼甥幼姪を相手に走せ廻はりて「サシヤ叔父さん」と呼ばれ、「叔父さん〳〵」の聲は宮城一ぱひに鳴り渡るなり。露帝は屈强の躰格非常の腕力を有し、好んで其甥姪の中央に突立ちて總かゝりにて引倒させらるれ共、一回も引倒されしことなし。亦帝は馬の鐵沓を片手にて握り曲げ、一束の骨牌を重ねたるまゝ平氣に寸々に引裂かるゝ程の大力也。帝の好まるゝ所は、漁獵、グラットストーン氏と同じく伐木、演劇、また音樂舞蹈を好みて、閑暇の折々は之を幼皇子に敎へらるゝ事あり。帝は自から音樂堪能を以て許し。好んで樂器を弄せらる。一日大臣某重要なる文書を帝の前に讀み居りしに、帝忽然立つて隣室に走り入り、三十分ばかり樂器を弄して歸り來つて云はるゝ樣「卿許されよ、興來つて堪へ難かりしなり」と。露帝の人物尤ともすぐれて見ゆるは、家居の時にあり。露帝の幸福なる時は家居の時にあり。露國皇帝の位は尊しと雖も、世人は皆云ふ、寧ろ一市民に生れ玉ひしならば更に妙なりしならむ」と。

# 婿えらみむすみ



駿河國安倍郡羽鳥村といふ所に、杉野正兵衛といふ百姓あり。田地五町ばかり先祖より持ち傳へ、正兵衛の代になりて一度は東京見物もしたことのある、村にては先づ口聽きといはるゝ中百姓なり。此村にては報德講の先生、色々と世話なされしかば、近頃は舊暦を廢し、今年も新暦の正月をしけり。

今年人日の朝早くより起きて、正兵衛は、木綿の坐布團にすはり、煙草くゆらせて居る、そばには此家に厄介になり居る姪のおふく、寒さ故あか切のきれた手をいきにてあぶりながら椽側を雑巾がけして居る、娘のおみちは眞鍮の金だらひで手洗をつかつて居る。正兵衛、煙管をポンとはたき「こりやおふく今日は村長殿の舍弟を始め三四人の衆が見へる筈じや、せいだいて掃除してくれ。お福「はい〳〵娘のおみち「とゝさん今日はいかひ朝やけじや風が吹かねばよいが。折からいきせき入來りしは一個の若者にて、年の頃二十二三親の代より正兵衛の

小作をなし居る次郎吉といふ男なり。兼ねて遠慮なく出入るものなれば庭口より椽側に廻り「おふくさん、朝からせいが出るね。 庄兵衛「いや次郎吉か、おらが内ではまだ粥も喰はぬ、ゑらく早く來たが、何か急用でもあるかの。 次郎吉「旦那さま、御早ふ御座り升、ゆうべ御かどまで參りやしたけれど、もふ御しづまりなされた樣子だんて、もどりやしたが、實は昨日の晩景、こんな拾物をしやしたと言ながら懐より蟇口を取出し、中にはよほど札がはいつていましたから、落とした人はさぞ迷惑して居ることであらふと思ひ、中を改めて見やしたら、何か字の書ひてある紙がありやしたで若も落主の手がゝりでも知ることがあるならと存じ昨晩すぐと上りやしたけれど、もふおしづまつて居ましたから、今日早く飛で來やしたのです、一寸讀んで下さいやし、早速落主へ届けやすから。おふくにつこりして「次郎吉さん正月から寶の拾ひ物、緣起がいひね、それもお前が不斷から親孝行だから天とう樣が御惠みなさつたのだろふよ。」正兵衛はおふくに言付け机の引出しから眼鏡取出させてかけながら「ム、次郎吉、これは村の細井先生のじや、こゝに細井若雄といふ名刺がある、貴樣のやうな正直者に拾はれたのは、先生の幸福じや、すぐに御届申すがよい、貴樣もいひ男だがかなしや字が見へぬ、今からでも稽古しやれ。しかし感心な心掛じや、おふくろは堂かの。 次郎吉「いやも毎日同じやふで少しも藥の驗が見へませぬ、御醫者樣も老病故、しかたがない、善くいたわつてやれといはつしやる計りです。左樣なら旦那樣、細井先生まで行つて參じませふ。

其朝正兵衛夫婦、作男の六兵衛、七助、娘おみち、姪おふく、家內都合六人にてめでたく七草の箸を取りしまひければ、六兵衛と七助は肥桶をさげて麥畝に出て行きぬ、誠に百姓は冬も隙なき者なり。この物語を書きし作者、幼き時田舍に住まひしが、いつも小兒同志むれあそぶ鎭守の森の側に麥畑ありて、こゝに耕作にいとまなき百姓あり。或るときふと我等を顧みて、お身等は學校に行く子供衆なるべし、さらばこれよみて麥をばふみあらし玉ふなとて、茶碗の碎片にて、地に書きつけて見せしは

百姓の苦は誠なり麥畑

江戸にて宗匠など曰はるゝ人に見せたらんには、むげに下手なる句なりと曰はんも百姓の心は誠にこゝなるべし。小供心にも氣の毒に思ひぬ。こはこの話にかゝはりたるとならねど思出しまゝ書付侍る。

さて冬の日脚早くも晝過ぎになりしかば兼ねて約束したる如く、村長の舍弟羽鳥藤九郎、隣村に近頃出來し派出所の巡査鹿津目九郎、村會議員條尾勇太郎、小學校の校長細井若雄なんどいふ面々追々と此家に集りけり。これは正兵衛が碁の相手なり。正兵衛は小文才あり、一寸俳諧もなり、殊に圍碁は村中にても指折りなれば、時々村の天狗連を集め、又はこちらより出掛けなどして白黒を爭ひ、果ては手作りの酒で一杯はじめ、夜を深かすが常なれば、時々女房に小言を曰はるれども、これだけはわしが病氣じやとて止めかぬる道樂なりとぞ。今日も正

兵衛一々來客を出迎へ「これはこれは藤九郎どん、よふこそ、今日は此間の仇打、是非弔ひ合戰をせにやならぬ、なんの〳〵美事勝つて見せ升ふ。なに今一目餘計に置けと、これは恐縮。鎭守の森の狐にでもつまゝれての其大言か。いや鹿津目樣近頃は村も無事で先づは御安神、しかし折角の御非番をいぢめて上るが氣の毒だ、この間は大層の御せきこみ、あの刧で局面一變は肝がつぶれ升たらふ。ナニ細井樣此間の御名句は妙でした「初雪やごま鹽ほどもふりはせず」とはアノ十狐庵の白髮頭へのあてつこすり、足許から鳥が起つたのには流石の彼れも驚いたでしやうと、八方へ話の種のふりまきあんばい、百姓だけに上手なりけり。やがて二面の碁盤に打向ひ庄兵衛は藤九郎、鹿津目は條尾と銘々碁石を握りパチリ、パチリ。

碁に客を呼ぶならば、主人ともに二人か四人にすべし、三人にても五人にても一人は手もち無沙汰になる者なりと或る老人曰ひけり。扨も細井若雄は此村の學校に來始めしより、正兵衛に贔負され、今日も招かれしかど、元來圍碁は少しも知らぬ者なりしを、近頃正兵衛に稽古したる位なれば、誰れの相手にもならず唯見て居るばかりなり。しかし餘程怜悧の男なれば傍より時々秀句など吐きて坐興を添へ、少しも退屈な顏をせず。正兵衛が當世風の才子なりと賞める筈なりけり。折から障子明けて此處に入來る娘おみち、そこにかしこまりて「皆樣ようこそ、御出でなさりました、おとゝさん御煮花が出來ました。と顏に愛嬌あれど口にかざりなき、澁塗の盆に茶碗五つ、細井の顏を見て「これは細井先生此の間は御土産を誠にあり難ふ」

細井心に思ひけるは、おみち田舍娘なれど、まんざら棄てた者に非ず、殊に此家では婿を取らねばならず、わしは次男故養子に行つても善い身分なり。正兵衞夫婦は御心よし、しうとにして苦しからず、田地は五町歩丸取り、これは善い商法と心の盤桁を合せて、いよ／＼正兵衞の機嫌を取り、其日は面白おかしく過ごし、やがて暮かゝりければ、とろゝ汁に青のりかけ、麥飯に新酒の馳走出で、皆々打興じつゝ、おの／＼再會を約して家路にいそぎぬ。條尾鹿津目樣その丸木橋はくらくて渡られぬお飛びこしなされ。

正兵衞はあとを片付させて、やがて寢室に入り、聲をひそめて「これおかゝ、そなたはなんと思やるぞ、この間話した婿のと、わしはもふ了簡極めた、娘がなんといはふとも此村で次郎吉ほどの男はないぞ。わしは第一其心根にほれた。わしが家は代々百姓、百姓の家は百姓が繼ぐがあたりまへ。わしじやとて字の讀める婿、ほしくないでなけれどあの細井の樣な奴は博士とやらでもいやなり。今日も次郎吉が拾ふた金を屆けたかと問ふたれば、運よく手許に歸りました、次郎吉の御蔭との挨拶、しかし小十圓もあつた金只還してもらつて、一錢も禮をせぬ樣子。次郎吉がおふくろの病氣で居ることと細井とても知らぬじやあるまいに、十圓拾はせて小札一枚くれぬ心掛け、微塵もたのもしき所なし。それに引かへ次郎吉を見や、あれ程こまつて居ながら拾つた物は隙をかいて落主に屆けてやる親切、心のきれいなと、細井にくらべれば墨と雪じや、それに母親の長病足かけ四年、つひ惡るい顏もせず、年中高ひ藥を呑せながら小

作の年貢は一度も滯らせたることもなし。あの年頃の若者には珍らしいと。身分は賤しけれど心は御公家樣もはづかしい程なり。なんとあれに極めようではないか。妻の聲として「それはもう、御前の了簡次第じやけれど、おみちは堂やら細井さんに心のある樣子、そぶりでも知れてある。作男を婿にしてはあの子の肩身が狹からふ、すかぬ婿を親の威光で取つてやつたとて、それでわしらが安心もならない道理と流石女親は氣の弱き者なりけり。折しもどこかの森で梟の聲、ホウ、ホウ、　母親「おやづくが鳴くに、おまへもふ寢なされや。

…………………………………

今日は雨故畑もならねば次郎吉は朝より土間にて草鞋を造り、母は少し氣分よければとて起直り、口の欠けた土瓶に湯をわかして居る。折りしも「次郎吉どん内にかと、こゝに入來れるは作男の七助なり。次郎吉は藁をたゝきながら「ふつて出られぬからこんなことをして居る、まあ上つて茶でも呑まつしやれ、　七助「お前の樣に働くなら、ほんにかせぐに追付く貧乏なしだ、おつゝけ、樂になるだろふ、お袋、今日は大分顏の色がいゝの、孝行息子をもつた御前は仕合せ者だ、　次郎吉母「ほんに次郎吉がよくしてくれる故、四年越の長病だけれど、天とう樣へもつひ御怨みを申したとはない、七助どんほめてやつて下され。七助此答へはなくて「今日は御使に來た、これは次郎吉どんの孝行に感心して御孃さんからの御使物だと持來りし風呂敷包を廣げれば、鷄卵二十個ばかり、自然薯の粉一袋田舍故折にもつめず、反古につゝみたり。破れ疊

の上にころ〳〵と轉げ出せば、お袋ははや涙「ほんに旦那樣、御ゑ樣、御孃樣の御厚恩、次郎吉忘れてはならぬぞや。七助はいとま乞して歸り行く。

其夕。細井は學校の部屋にてランプ付けながら獨り言「いやふるぞ〳〵。田舍はさみしいものだ。毎晩梟の聲でねつかれぬには恐れる正兵衛のおやぢ、もふ向から言出しても善い時分だのに、何を遠慮して居るか、此間の碁會。おみちのそぶり、正兵衛の口前、向ふでも十分氣のある樣子、それを覺つて鹿津目が歸り路の雜言、おれの背をたゝいて、やれ當世の才子、あやかりもの、などゝ言居た、世間ではもう兩方できまつた樣に思て居るのに、あちらから確とした言込のないのは堂言ふ譯か、或ひはこちらから言込のを待て居るのではないか。先ずれば人を制すだちつと見識が下るか己から言込んで見よふと厚顔しくも手紙を書き人に賴んで正兵衛方に送りしかば、正兵衛夫婦膽をつぶしおみちを呼で尋ねけるに、夫婦が思ひしとは丸でちかひ、おちみは細井の男らしからで至つて輕薄なるを毛虫の樣に嫌つて居たると判然せしかば、夫婦言葉をそろへそれなれば次郎吉は作男ながら見所あり御身の夫にと思へどいかにやと問ひしに、おみちサット面赤め「御兩親の思召通り、わたしにいやはありませぬ。

此緣これにて芽出度まとまり、禁裏樣御大婚第二十五年の御祝行なはせらるゝ日に盃することゝなりしとて、田舍より文の端にくはしく言ひ越しぬ。

いつまでも共にくむ井の底清みむすびもかはせ本の心を　　室直清

---

**社告**

○家庭雜誌品切れのもの 第一號、第二號、第三號、第四號、第五號、第六號、第十三號、第十四號

右の各號品切にて以後再版等も不仕候に付御注文に應し兼候間前以て御斷り申上置候

---

## 家庭雜誌

○每月二回十日廿五日發兌

| 定價 | | 郵稅 |
|---|---|---|
| 一冊 | 金五錢 | 金五錢五厘 |
| 半年(十二冊)前 | 金五十錢 | 地方郵稅 金五十六錢 |
| 一年(廿四冊)同 | 金一圓 | 共 金一圓十二錢 |

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局
○代金郵券代用ハ爲替ノ無キ地ニ限リ五厘切手ニテ一割增ナレバ差支ナシ


發行兼印刷人 垣田純朗
編輯人 塚越芳太郎

發行所(電話番號七十番)東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社
印刷所 東京市京橋區西紺屋町 株式會社秀英舍

明治廿五年九月十四日遞信省認可

